んか。」と幾子は倉橋に言つて、「ねえ荒尾さん、二月でも三月でもお知合になつて、又かういふ所でお目に懸るといふのも何かの御縁ですわ。今日は家族皆なして網打ちに行きまして、主人も今後から參りますが、毎々貴方のお噂は致してゐるので御座いますよ。如何です、亮一も連れて、是から御一處に私どもへ……六方ヶ谷の松崎大將の御別莊、御存じでせう、此所からは最う近いので御座います。」

「有難う。や、然し今日は是で失敬しませう、御緣があつたら又たお目に懸ります。」

内には反感を含んで、口ばかり喋々しい饒舌の彼等を對手に、何時まで無用な辭を交へるのも累はしかつた。

「さあ亮一、お前も最う家へ歸れ。病後の體で何時まで遊んどるのぢや、夜風に當ると可かん、早く歸れ。己れは月の出るまで其所らを散歩して歸るで。」

亮一は一人素直に歸つて行つた。江の島の方にはチラ〳〵明りが見え出した。

「それぢや奥さん……御主人にも何か宜しく。」と荒尾は手にした帽子を冠つた。

「まあ待ち給へ、荒尾君。折角夫人もあゝ仰しやるのに、君も餘り素氣が無さ過ぎるぢや有りませんか。少々の不體裁は寛容して頂けば可い、君のやうに何も遁げるには當らん。」と倉橋が意地になつて留めた。

「何？遁ぐるとは！」荒尾は思はず立留つた。「君等に對して、僕は遁ぐる理由は少しも無いですぞ。況して寛容を乞はなければ成らんやうな不體裁は、決して荒尾はして居らん。敝れたる褞袍を衣たればとて、心は許由の自ら耻ぢざる此の誇りが、何で君等に分るものぢ。區々たる小人の心を以て妄に人を忖度するな！」

「まあ、隨分貴方も……」と夫人も聞きかねた。

「何ですと？」

「いえ、思切つた事を仰しやると申すのです。」

「はゝゝゝ、是くらゐ露骨に窘めてくれんと、愚物は増上がるです。」

「愚物だの小人だのと、失、失敬な！」

倉橋は耐りかねたやうに、持つてゐた釣竿を捨てゝ拳を握つた。二人の漁師も邪魔な持物を地に置いて、驚破と云はゝ倉橋に加勢しようとする氣勢を見せた。

荒尾は大口開いて笑つた。杖いてゐる鐵鞭を丁と大地へ鳴らして、長い頤髯を波立たせながら、空を仰いで嘯き笑つた。

「おゝ、東が明るうなつた。月も早や出汐になりて鹽竈の、ちらさび渡る景色かなぢや、どう。」

「君は？荒尾君ぢや無いか。」

丁度其處へ森則之が來合せたのであつた。

和服に襟卷をして、ステッキを片手に鳥打帽子の下から荒尾を透し見た。一人の書生が釣竿と餌巻を下けて後に從つた。

「はあ、荒尾です。其の後は御無沙汰しました。毎も御健勝で何よりです。」

「君もお變りは無いか。意外の所で逢うたね。丁度可い、色々話したい事もある。今日は家族の者と漁に出掛けて、大分海の幸もあつた。是から歸つて料らせて、久振りに一献酌まう、相變らず君は飲けるかね。」と笑ひながら左の手で飲む眞似をした。

「近頃はとんと其の方も下りました。折角のお辭ではあるですが、今日はお預けしませう。他日又……」

「まあ、禁り言はすと、可いでは無いか。」

「飢る者は食を爲し易く、渴する者は飲を爲し易しで、まあ伺はん方が僕には間違ひ無いです。」

「君はそんなに飢ゑ且つ渇して居るのか。それなら仍更私も聞きたい事が……」

「あゝいや……一箪の食、一瓢の飲、賢なるかな回やです。」

「君の材を以て、それでは餘りに惜しい……」

「回や其の樂みを改めずです。」

荒尾は然う言捨てゝ、獨り渚傳ひに飄然と去つた。夕暮の色は最う邊りに迫つて、其の後姿も直き見えずなつた。則之は感慨深く見送つたまゝ、夫人に促さるゝまでは何時までも其所に佇んでゐた

「貴方、さあ、參りませう。」

「おゝ。」

一行はゾロ〳〵と後に從つた。

則之は愚人にあらず大丈夫也未聞門に到ることあるべし

荒尾譲介

其二

月は上つた。十三日ばかりの殆ど眞圓に近い影は、海を畫のやうに明るくした。チラ〳〵と波に碎くる影が銀色に湧いて、渚に散る汐繁吹きがマグネシユームを焚くやうに白く光つた。

手拭を眞深に冠つて、手頃の棒を持つた二人の男がウロ〳〵と邊りを見廻しながら來た。それは曩憲作や幾子夫人の供をして歸つた漁師等であつた。

「若樣も倉橋さんも一處に來て助勢すりや可いだに、狡いだよ。」と年半りの方が言つた。

「何に、來ると却て邪魔だ。助勢なんか無えだつて、己れ一人でも遣付けるだよ。」と若い方が腕卷りして見せた。

「最うそれでも、戻つて來さう。なものだ。」

「此所らで待伏せしべい。」

渚に引揚けてあつた漁船の蔭に二人は身を隠した。其所に群がつてゐた千鳥が驚いて一度に鳴き翅つた。

間も無く、

「今人は見ず古時の月、今月曾て古人を照らし經たり、古人今人流水の若く、共に明月を看るもの皆此の如し……」と朗かな詩吟の聲が遙に聞えて來た。

それは荒尾が歸つて來たのであつた。滿身に月光を浴びながら、渚傳ひにブラ〳〵歩いては立留まり、立留まつては月を賞した。海は一層明るく輝いた。

「古人今人流水の如く、共に明月を看るもの皆此の如し……か、あゝ。」と感慨深さうに繰返し口吟んだが、「いや、惟願はくば歌ふ當し酒に對する時、月光長へに照らせ金樽の裏ぢや。どう、歸つて一杯傾けよう。」

荒尾は露に濕つた身中を撫でゝ、薄ら寒さうに肩を顫はせた。而して二歩三歩行き懸けた後から、曩の漁師二人が不意に躍り出た。彼の前後を遮つて、一度に物も言はず打つて蒐つた。

荒尾は逸早く身を翻した。

「えい、何奴ぢや！」と大喝した。

二人は無言のまゝ重ねて棒片を揮つた。

「うむ、貴樣等……頼まれたな！」と頷くと、荒尾は鐵鞭を取直してキッと身構へした。

彼が高等中學時代に柔道部で鍊へた腕に、我武者な漁師の腕立てが敵ふものでは無かつた。彼は唯妄みに打つて來る二人を殆ど素手で合觸つた。怪我をあらせまいと思つてか、故と鐵鞭も揮はなかつた。それでも二人は見る間に投げられたり捩ぢ伏せられたりして、這々の體で逃げ去つたのであつた。

後を見送つた荒尾は、ホツと一息入れて、靜に身繕ひをした、落ちた帽子を取つて、砂を拂つて冠ると、其のまゝ元の渚傳ひに飄々と歸道を拾つた。

暫く行くと、偶と又何やら目に付いて立留つた。其處は丁度、森の一行と荒尾が出會はした其の少し手前であつた。彼は一本茂つた松の木を小楯に、ヂツと訝しさうに向うを透し見た。

曇亮一が貝を拾つた其の岩蔭に、若い男女の姿が月の光に淡く影のやうに並んだ。二人とも見窄らしい裝をして潮風に顫へた。男は帽子も冠ずに蓬々とした頭をして、メリヤスのシャツに股引、單衣を重ねた袷布子の薄着の肩を窄めて、羽織を着なかつた。女も油氣の無い束髪の鬢がそゝけて交織物の着物も彌張り袷らしかつた。是も羽織を着ずにメリンスの袤々の帶をした。持物と云つては首に卷いたショール一つ、それも手擦れて古かつた。二人は言合せたやうに月影を仰いで、冷たい光に窶れた顏を照らしながら、

「あゝ、此所ですわねえ、晝間見て置いた所は。」と先づ女が言つた。

「此の岩が目印ですよ。」

「まあ、あの浪の音は何うでせう、怖いやうですこと！」

「いのも最う一思ひですよ。」と言つて男はヂツと女の手を握つた。

女もブル〳〵と顫へて男に寄り添つた。月の光に顏を見合せて、堰き上げるやうにハラ〳〵と涙を零した。

「貴方と一處なら、怖い事も悲しい事もありませんわ。一生連添つてゐても、死ぬ時は別れ〳〵に死なねば成りませんが、私はかうして死ぬ迄貴方と一處だと思ふと、それが何より嬉しいわ。えゝ、心強いわ。一時は貴方一人暗い處へ遣らねば成らないかと、私はそればかり悲しくて成りませんでしたけれど、かうして一處に……ねえ、彌張り二人の縁が盡きないのねえ。」

「其の縁の盡きないのが、究り二人の運の盡きなんですよ。かうならない中に、二人が別れられたら死なずとも濟んだでせうに、死ぬまで別れられないと云ふのも因果です。」

「貴方は直き因果だ、因果だと仰しやるけれど……貴方はそんなに私と別れないのが後悔なんですか、然ぞそれぢや一處に死んで下さるのが御迷惑でせうねえ。」と女の聲は怨みに顫へた。

「今更そんな……死ぬのが迷惑だなんて些とも有ませんが、唯ね、貴方を殺すのが濟まんのです。貴方には丁と約束まで出來た立派な嫁入先のあつたのを……僕が連れ出しさへしなければ、今頃は何不自由の無い奥樣で居られた者を、と思ふと濟まなくて、御兩親の手元へ貴方をお返ししたら、と毎も然う思ひながら彌張り未練で然うも出來ず、止の究りはかういふ悲しい因果な結果に陷つて了つて……今までいも嘸ぞ貴方の御兩親は僕を怨んでお居でいせうが、今夜の事をお聞きなすつたら、どんなに又お怨なさるだらうと思ふと、夫ばかりが……冥、冥路の障りです。」

「そんな最う親達の事は言つて下さいますな、昨夜も一昨日も其事では散々二人で泣いたのですから……。」

「子を思ふ親の情合といふものは、格別ですからねえ。」と言つて、男は物思ひに沈んだ。

「然う云つたら、私だつて貴方の阿母さんに怨まれてゐますわ。最うそんな事は考へないで……ねえ、貴方、邪魔の無い中に、ねえ、紀雄さん。」

「……」

「紀雄さんてば！貴方、今になつて何を考へるのよ。」

「雪野さん。」と紀雄は漸と頭を擡げて、「此の場合になつて、何も最う隱してゐるには及ばないから、打明けて話しますがね。實は僕、子どもが一人あるんですよ。」

「え、お子さんが？まあ……本當に？」雪野は呆れて顏を見詰めた。

「本當です。顏も行方も知らないが、有る筈なんです。何うか氣持惡くせずに聞いて下さいよ、最う古い事なんですから……かうと、僕が未だ中學へ通つてゐた頃、丁度十九の時です。父が死んで間も無く、母と二人で東京の小石川の場末に居た頃です、同し町內の漢學の先生の娘で、僕と一つ違ひでしたが……今言ふ僕の子どもと云ふのは其の娘に出來たのです。娘の父親は昔氣質の士族で、それに漢學でも敎へようと云ふ嚴しい頑固な人ですから、それが知れると非常な立腹で直ぐ娘を連れて何處へか引越して了つたのです。する中に、僕も母と一處に岐阜へ退込むし、それきり最う娘も、娘の父親も何うなつたか知りませんが、生れたのは慥か男の子で、生れ落ちると直ぐ里子に遣つて了つたと云ふ事だけは、東京にゐる中に聞きました。其時僕が十九……」二十、二十一、二十二、三四五六七と數へて、「今生きてゐると其の子も最う九歲です。何うか死んでゐてくれゝば却て幸ひですが、若し無事に生きてゐたら可哀さうだと思ひましてね。子ども心にも親は戀しい、其の親は今夜かうして此處で死んで了ふとは知らずに、今頃は何所で僕の事を思つてゐるか……此後も永い一生、此の世に居ない親を戀しがつて送るだらうと思ふと未練のやうだけれど一言今夜の事が知らしてやりたい。親子の緣が通じたら夢になりと見せたい……」と終ひには愚痴になつたが、「いや〳〵慈しひ知つたらどんなに嘆くか……知らん方が可い、一生知らん方が可い。」と頭を抱へて、物狂はしさうに彼方此方砂原を歩き廻つた。

雪野も始めて聞いた男の秘密に一度びは驚きもし、呆れもした。自分の先きに既に然うした子まで生ませた女があつたと云ふ事は、決して好い心持では無かつた。然し我が子の顏も知らずに死んで行く男の胸の中も、同情せずにはゐられなかつた。親の死んだのも知らずに遣さるゝ子も可哀さうであつた。

「まあ、そんなお子さんがお有りなのでしたか。それぢやお心殘りも無

理はありませんわ。然ぞねえ、かうして貴方がお死になすつたと云ふ事を、後になつて其のお子さんが知つたらどんなでせう。然う思ふと、一處に死んで頂くのが罪が深いやうで、私こそ其のお子さんの怨みが恐しい！」

「罪の深いのは僕です。自分の子を然ういふ不憫な父無し子にしたのも、元の起りは僕と云ふものが、親の許さぬ不義をしたからです。それにも懲りず、又貴方をこんな目に遭はせて了つて、重ね〳〵……あゝ、何と云ふ罪の深い僕でせう。貴方の御兩親にも此所からお詫びをします、行方の知れない我が子にも詫びます。雪野さん、貴方も赦して下さい！」

「まあ貴方、私が赦すも赦さぬも、元々私の方から貴方にかうなつて頂いたんですから、私こそ赦して下さい。お子さんの事もそりやお心殘りでせうけれど、何うぞ諦めて、何にも最う思ないで……」

「然うです。今更愚痴だ！返らぬ愚痴です、何にも最う思ひますまい。死ぬよりも愁い所へ遣られなければ成らない體ですもの、貴方とかうして一處に死ぬのが未だしも仕合せと諦めます。」

「何うぞね、私もそれで迷はずに死なれますわ。」と雪野は言つたが、「迷はずに死ねても……唯彼奴の事だけは忘れない、死、死んでもやる！」

「那奴はあれが商賣ですもの、怨んだつて爲方がありません。」と紀雄は諦めたやうに言つて、「人を怨むよりは、僕は……自分が怨めしい、自分の不効無いのが怨めしいのです！家を出る時は、全ざら先の考へ無しに出た譯でも無かつたのだが、僕が不効無いばかりに、僅か半年經たない中に、こんな、最う生きてはゐられないやうな身の詰になつて……」

「何も貴方が不効無いので、かうなつたのでは有りませんわ。東京へ來ると、直き貴方の脚氣がお惡くなつて、其の爲めに考へる事も思ふやうに成らなかつたのですもの、お互ひの不運ですわ。」

「不運さねえ。」

二人は手を取交して又泣いた。

「あゝ、丁度こんな月夜だつた……」と紀雄は思ひ出したやうに、「家を出たのは……あれは何月だつたつけね。」

「阿父さんの選擧の日の晩だつたから、八月の二日よ。」

「然う〳〵、丁度舊曆の盆で、好い月夜だつたね。ステーションで二人が落合つて、プラットホームへ出ると、其所らが晝のやうに明るくて、知つた者に見付りはしないかと、汽車の來る間が氣が氣で無かつた……」

「つい未だ此間のやうに思はれるけれど、あれから最う彼是半年ですわ。何だか夢のやうね。」

「夢だ！」

「夢だわねえ！」

其の夢のやうな半年の過ぎ越し方には愁かつた事、悲しかつた事、惰無かつた事の數々が偲ばれた。而して樂しいとか嬉しいとか云ふ思出は殆ど無かつたと云つて可い。二人が家を拔けて東京へ出ると、間も無く紀雄はドッと病み就いて了つた。それで無くとも、學校を休んで靜養に歸つてゐたくらゐなので、長途の汽車で無理をした爲めに、脚氣は急に重くなつた。一時は衝心の憂へさへあつた。二人が僅かばかりの用意も醫藥の料に足らなく、着更へや持物まで賣り拂つた。其の上に高利の金まで借りた。涼風の立つ頃漸と體も恢復して、而して或る私塾の英語の教師に紀雄が有り付いた時は、最う高利に追はれて僅かな俸給も燒石に水であつた。何一つ手に覺えの無い雪野は、滌ぎ洗濯の內職もした。賃仕事の足袋底も刺した、それくらゐにしても高利の方は滯るばかりであつた。延期料とか俥代とか云つて幾度も搾られた擧句、紀雄は苦し紛れに高利貸の言ふまゝ書替をした。其の書替が紀雄の身の破滅となつたのである。それは高利貸の口車に載せられて、私印私書僞造行使といふ刑

事上の罪を犯したのであつた。然かも終に返金の道の立たない今は、其の犯罪を公向きにされるより外は無かつた。親を棄て生れ故郷に背いて唯男一人を力として憂い月日を送りつゝある雪野は、男に放れて一日も生きられようとは思へなかつた。男も亦、體も心も人並とは弱い人間である。刑に處せられて、何年といふ愁い悲しい苦役に堪へられやうとは思へなかつた。思案に餘り、途方に暮れた擧句二人は期せずして死と云ふ事に一致した。而して當も無く東京を出たのが三日前、それから二人して死場所を探し〳〵鎌倉まで來た。僅かばかりの旅費も使ひ盡して、明日からは最う宿屋の拂ひも出來なくなつた今宵、二人は愈よ最後の覺悟を決めて宿を脱け出したのであつた。

「さあ、最う泣かないで……」と紀雄は氣を取り直して、「ねえ、臨終の一念で未來へ情を引くと言ふから、何も彼も忘れて、お互ひに最う清い心になつて行きませう。」

「私は最う、貴方とさへ一處なら、何にも外の事なんか思はないわ。」と雪野も潔く言つた。

「能く言つて下すつた。貴方の其の美しい心が、僕の冥路の明りです。ぢや何時までかうしてゐても果しが無い。話せば話すほど心の迷ひが起つて、却て臨終の障りになるばかりだから……さあ最う、一思ひに覺悟しませう。」

「えゝ、私も覺悟してよ……何うぞ一目見納めに最一度……」

「さあ、お互ひに是が……見、見納めですよ！」

二人はシッカリ抱き合つて、涙に濡れた顏と顏とを觸れ合つた。月は生憎曇つた。

「雪野さん！」

「紀雄さん！」

無心の空も、死行く二人を悲しむものゝやうに暗くなつた。二人は蹤

と手を取交はして、つと岩鼻に進んだ。

「危い！これ、貴方達は何をする！これ飛んでも無い！」

聲と共に力強い手が二人の肩口に懸つた時は、二人の足が危く岩鼻を放れる處であつた。

引留めたのは荒尾である。何時の間にか隱れてゐた松蔭を放れて、ソッと二人の後に忍び寄つたのであつた。餘りの不意に、二人は地平へ押据ゑられたまゝ、只唯驚き呆れて荒尾の顏を透かし見た。

「何、何方か存じませんが、到底も生きてはゐられない身の上ですから、何うぞ何うぞお見逭しなすつて……」と男は言つた。

「宜しい！」と荒尾は力のある聲で、「見逭してくれなら見逭しも爲よう。だが、生きて居られん理由を話しなさい、其の理由に由つては、な、死ぬのも可からう、決して邪魔はせん。」

二人は首を垂れて了つて、答へは無い。荒尾は察する處のあるやうに

獨り頷いて、

「見れば二人とも未だ若いやうぢや。能くある例で、互ひに思ひ合うた仲が、何ぞ故障あつて此世では添ひ遂ぐる事が出來ん。それで一途に死なうと云ふ……それかな？」

「……」

「僕は決して物好きやおセッカイで、貴方達の私事に立入らうと云ふでは無いですぞ。若い二人の命を惜しめばこそ、かうして留めにも出たのぢや。局に當るものは迷ふ、貴方達が死なねばならんとまで思ひ詰めた理由も、局外の僕には何とか又、死なんでも濟むやうな解決が付かんにも限らん。死なずに濟むものを死なした、生きらるべき二人の命を棄てさせた、と云ふ悔が若しあつたら……此の場を見ねば左も右く、眼前に見た以上、神明に對して僕が濟まん。さあ、死なねばならん理由を聞かせなさい！」と荒尾の聲は鋭かつた。

「はい……然う仰しやれば申上げん譯でもありませんけれど、是には色々混入つた事情がありまして……」と漸く男の口が緩れた。

「それや死なうと云ふくらゐちやから、何れ面倒な事情もあらう。一體貴方達は何所から來たのか、それとも此の土地の人かな？」

「はい……二人とも元は岐阜の者でありまして……」

「岐阜？岐阜なら僕にも緣の深い所ぢや、ほう岐阜から故々……」と言葉して、荒尾は今更のやうに瞳を凝らしてジッと二人を見た。

其の辭に女も偶と顏を上げて荒尾を見た。雲は薄くなつて、月は稍光りを增した。

「樣子は變つて居らるゝが、貴方は若しや、大館さんの？」

「ゑゝ……貴方はあの？」

「荒尾です、荒尾讓介です！」

「まあ！面目御座いません！」と雪野は顏を掩つて消えも入りたさうに見

えた。

紀雄も驚いた。耻しさと面目無さとに顏を見られるのも愁かつた。

「彌張り然うでしたか。大館さんのお嬢さん……、あゝ、彌張り然うぢやつたか！」と荒尾は憮然として、空を仰いで其の願髯を扱いた。

身投げを助けた、危い男女の命を取留めた、それだけでも不思議な遭遇と云はねば成らぬのに、然かも助けた其の一人が、自分の恩人の娘であらうとは！啻に恩人の娘であるばかりでは無く、嘗ては自分の一生連添ふことに決つた其の女では無いか！。其の女は自分を裏切つて仇し男と身を隱くした。其の對手の男は、恐らく自分の前に躇つた其れであらう。憎むべきか、憫むべきか、怨むべきか、慰むべきか、荒尾の心は混亂せずには居られなかつた。然し僅の間に見違へるばかり女は窶れて、此の寒天に羽織も無しで顫へてゐるのを見ると、有繋に憫れが先に立つた。而して若い命を自分で葬らなければ成らないまでに立至つた二人の

其の窮迫も、同情しない譯には行かなかつた。

「僕も、言へば言ふべき事もあるが、まあ其れは言ひますまい。なあ、お嬢さん若氣の至りとは云ひながら、貴方も飛んだ無分別をして退けましたなあ！大舘先生と云ふ天下の名士のお一人子に生れながら……いや、それを今更尤めたとて爲方も無い。が、貴方の家出を阿父さんはどんなに情無く思うて悲しんで居らるゝか。それさへあるに、今夜の此の體たらくは何事です！僕が幸ひ通り懸つたから可かつたものゝ、是が貴方達の思ひ通りに死耻を曝らしたとしたら、御兩親のお歎きは如何ばかりぢやらう。重ね〴〵の無分別、不孝に不孝を重ぬるものですぞ！」

雪野は袂に顔を埋めて、唯咽び入つた。

「君も善うない。」と今度は紀雄に向つて、「怪しからん男ぢや。良家の處女を唆かして、其の貞操を弄び、其の幸福を犧牲にさせ、搗てゝ又命までも棄てさせようとする。許すべからざる道德上の罪人ぢや。自分も死ぬほどの覺悟があつたら、何故君は自分の肉を裂いても、愛人の爲めに生きて幸福を圖つてやらん？」

「はい……誠に面目次第も無い譯で。」

「で、死ぬとまで思ひ詰めた理由は、彌張り食ふに食へん饑渴の爲めか。それとも最つと外に事情が？」

「はい……何うぞ最う此のまゝお許しなすつて……外ならん貴方と云ふ事が分りましては、かうしてお目に懸つてゐるのも愁いので、助けて頂いたのも心苦しいのですから……」

「默んなさい！」と荒尾は叱して、「君の如き道義心の缺けた意志の薄弱な人間は寧ろ此の世に居らん方が社會の爲めなのぢや。それを責むべきも責めず、虛心坦懷を以て君等の窮狀に同情して居る僕に向つて、助けて貰うたのが心苦しい？それが禮ある言草か？」

「いえ、そ、そんな意りで申上げたのでは有りませんので……唯お憎し

みを受ければとて、御同情なぞ受けられる筈でも無い私に、色々御深切に言つて下さるのが勿體無くて……何うぞ御感情を害しましたらお許しなすつて……最う貴方にお縋りするより生きる道は御座いませんのですから……いえ、私は左に右く、雪野さんを可哀さうと思召して……」と紀雄の狼狽方は無かつた。

「それなら可い。僕も大舘先生に對する義理として、此のまゝに見過す事は出來んのぢやで……ぢや、詳しい事情を話しなさい。」

「はい、申します、何うぞお聞きなすつて下さい。あゝ……何からお話し申して可いか……究り私が効性の無い爲めに、不義理な借金を拵へて、それがかういふ身の詰りになりましたので御座います。」

「不義理な借金と云ふと何う不義理な？」

「まあお聞きなすつて下さい。私は此夏國を出ます時から脚氣で御座いまして、それを汽車に搖られて無理をしましたものですから、急に重つて、東京へ着くと間も無く體も動かなくなつたので御座います。一時は衝心しさうになりましたので……其爲めに少しばかり用意して來た金も直き無くなつて了ひますし、雪野さんも餘所の賃爲事や手内職までしてくれたので御座いますが、醫者だ藥だと云つてなか〳〵追付かんものですから、苦し紛れに高利を借りたので御座います。」

「高利を？ふむ。」荒尾も人事ならず頷いた。

「それも全ざら返す當無しに借りた譯でも御座いませんので、私が體さへ治れば或る夜學の塾へ英語の教師に傭はれる事になつてゐたので御座います。處が病氣が意外に永引いたものですから、漸と塾へ通ふやうになりました頃には、最う高利の方が利に利が嵩んで、なか〳〵夜學の教師ぐらゐの端月給では、埋めも何うも出來ないやうな始末で、書替に書替と金高は昇るばかり、最う債權者の方でも私の一判では承知しなくなつたので御座います。是非連帶者をと言ふ事で……けれど、何を云ふに

も馴染の淺い土地ではありますし、誰と云つてそんな印を捺してくれるやうな知人も御座いません。其處で惡い事とは知りつゝ、私の備はれてゐる夜學の塾長の印を內密で拵へて……」と紀雄は言淀んだ。

「ほう、ぢや其の塾長の名を無斷で連帶者に使うたので？究り私印私書僞造行使ぢや？」

「はい……然ぞ呆れた奴と思召すでせうが……」

「いや、能くある手ぢや。君は高利貸に巧く懸けられたのぢや。」

「全く然うなので御座います。證書を貸親に見せるだけの爲めだから、唯表面の名義さへあれば可い、內情は自分が呑込んでゐるから、と誠に手輕に申しますのですから、つい其の口に乘りまして、取返しの付かない大罪を犯して了つたので御座います。でもまあ延期料だの俥代だのと、其場凌ぎの金を何度と知らず取られ〳〵して、漸と先月まで延ばして來ましたので御座いますが、先月の末には最う何うしても元利を取立てぬば承知しなくなりまして、已むを得なければ連帶者へ請求すると言ひ出したので御座います。それは始めの約束と違ふと申しても、固より向ふはかうなるのを見越しで巧んだ事で御座いますから、天で取合もしません……」

「それで塾長の方へ行つたのですか。」

「さあ……若し行つたら、塾長に私は合せる顏が御座いませんから、先月限り塾へも出ませんので、其處の所はハツキリ分りませんが……塾長とても未だ昨今の私に對して、默つてそれを引受けるほどの好意も有る譯は御座いません。」

「ぢや、究り私書僞造で訴へた？」

「か未だですか……左に右く先月まであれ程嚴しく催促に來た奴が、それきりパツタリ來なくなりましたから、最う訴へるより爲ようが無いと決心したものと思ひます。それきり今月になつて何とも沙汰が御座いま

せんでしたが、此の四五日前、手前の留守に些つと來まして、女ばかりでは話も出來ないから、又出直して來ると言つてプイと歸りましたさうで……最う年末の事でもありますし、愈よ最後の駄目を押しに來たので御座いませう。今度は到底も用捨はしますまい、無論訴へるに決つてゐます。私のやうなこんな弱い體で懲役にやられて、到底も堪へられやうが御座いませんから、寧そ一思ひに死んで了はうと決心しまして……」

「成程。」と荒尾は雪野の方を見遣つて、

「それで雪野さんも一處に死なうと云ふ事になつた？」

「然やうで御座います。雪野さんも今になつては沁々後悔して、かうなるのも皆な親の罰だから、死んで不孝のお詫びを爲よう。私も死んで皆さんにお詫びをする、かう二人が覺悟を決めまして……」

「そりや善くない覺悟ぢや。曩も言うた通り死耻を曝らして親に嘆きを懸ける、不孝に不孝を重ぬる譯ぢや。決して詫びには成らん、で、差當つて金の問題ぢやが、一體金高は幾らかな？」

「えゝ……元利積つて、二百八十圓と少々になりますので。」

「二百八十圓？ぢや、百四十圓づゝで君等の命は貰はるゝ譯ぢやね、はゝゝゝ」と荒尾は笑つた。

紀雄も雪野も思はず其の顏を見擧た。殊に紀雄の方は息まで彈ませて、

「はい、然、然うで御座います。合せて二百八十圓、それだけで二人は助かるので御座います。」

「と口では言うても、金と云ふ奴はな！……」と腕を組んだ。

紀雄も案に相違して、ガッカリして首を垂れた。

「何とか談判して、差當りまあ告訴を待たせるより爲方が無い。何と云ふ高利貸？」

「間と申すので……」

「何？」

「麹町三番町の間貫一、高利貸の中でも有名な方ださうでして……」
「彼か！」と荒尾は太い力の籠つた聲で、押出すやうに呟いた。
「御存じで？」
「知らんでも無い。」と言つて、長い髯を手暴く扱いた。

其三

雲は何時の間にか晴れて、月は又晝のやうに冴え渡つた。荒尾は腕を組んで考へながら、間の名を口の中に繰返しながら彼方此方歩いた。紀雄は何と言ひ出すかと、固唾を呑んで其の難かしい顔を見成つた。

處へ、渚傳ひにザク〳〵と砂原を踏み躙りながら、急ぎ足に此方らへ近づいて來る人影があつた。雪野は逸早く其の足音を聞付けて、ソッと紀雄に知らせた。先方も此方らの人影を見付けて訝しさうに立留つたが、直ぐ又ッカ〳〵と寄つて來た。

「貴方達は、河原さんの御夫婦達ぢや有りませんか。」
紀雄も雪野もハッとして返事も出なかつた。荒尾はキと其の聲の方を見遣つた。
「河原さんですね。あゝ、先づ可かつた。」と其の男は胸を撫でゝ彈む息を鎮めた。
荒尾は二三歩其方らへ進み寄つて、
「間！」
「え？」と目を見張つて、「おゝ、荒尾君か！」
それは紛れも無い間貫一であつた。彼は荒尾の顔を見ると、先づ其の意外に驚いて、夢かとばかり怪み惑つた。行きなり飛び付いて、對手の指も千切れるほど握りたい手を、獨りジッと固めてブル〳〵顫はせた。月の光を浴びて、枯木の如く突立つた荒尾の心を圖りかねて、唯息を凝して其の顔を見詰めるより外は無かつた。荒尾の目の中には露のやうな

光があつた。

「間、迷惑ぢやらうな。」と荒尾は重々しく口を切つた。「會ひたう無い者に會うて君は迷惑ぢやらう？」

「會ひたく無い？誰に？」と貫一も漸と憶した聲で問返した。

「誰なものか、僕によ。」

「君に會ふのが迷惑？何故？そんな事は決して僕の方は無い。」

「無い事も無からう。實を言へば僕の方も迷惑なのよ、會ひたう無い君に會うてかうして口を利き合ふのは。」

「然う、君が然うなのだ。僕は此前君が訪ねて來てくれてから、一日だつて君の事を思はん日は無い。あのまゝ別れて了つては如何にも殘念で……別れてから色々僕も考へた事もあるで、何うか最う一度會つて、にも沁々聞いて貰ひたいと思つて……」

「何を聞くのぢや、お互に最うあの時限り聞く事も聞かせる事も無い

ぢや。」と荒尾は壓へるやうに言つて、「あの時僕は劈頭第一に何と言うた？友の德義として一旦は僕も訪ねて來た、斷然君を棄てるも棄てんも、唯今日に由つて決するのぢや、とかう君に宣告して置いたのを忘れはすまい。然るに君は飽くまでも非を遂ぐる、忠告は有難いが肯く事は出來ん、とまあ然う言うたも同じやうな返事ぢやつたから、僕も始めの宣告通り、あの日を最後に君を棄てたのぢや。棄てゝ再び君には會ふまいと固く心に誓うたのぢや。其の誓を破つて、今夜此處で君と口を利かねば成らんと云ふのも……それも究り、君の高利貸たる事が僕にまでも或る累を及ぼしたからぢや。で、今夜は無論君を友として口を利くのでは無い、高利貸として僕は談判するのぢや、可いか。」

「……」

「此所に居る河原さんとか云ふ此人は、君の債務者ぢやさうな、然うか。」

「然うだ。僕は今其の爲めに、お二人の後を追駈けて此所へ來たので……」

「成程、其のくらゐ執拗で無ければ其の商賣は出來まいな。」と荒尾は苦々しげに云つて、「ぢや二人が若し死んどつたら、君は恐らく死人の身の皮も剝ぎ取つて行きかねんぢやらう。此の二人はな、間、君の毒手に苦しめられて危く投身する處ぢやつたぞ。折好う僕が通り懸つて引留めるだけは引留めたが、是が一歩遲れたものなら、僕は恩人のお嬢さんを、明日は淺ましい水死の死骸として此濱で發見しなけりや成らんかつたのぢや。」

貫一は吃驚して、

「君の恩人のお嬢さん？　河原さんの何は……」

「君も昔の間貫一時代に僕から聞いて知つとるぢやらう。僕が終生の恩人としとる岐阜の大館先生、大館朔郎さんのお嬢さんぢや。」

此の不思議な邂逅に、貫一は呆れて雪野を見た。雪野は始終俯いたまゝ、固く石のやうになつて蹲つた。

紀雄は此の間を見圖らつて、漸う貫一の方に顏を向けた。

「間さん、誠に申譯が御座いません。金も返さずに、不都合な奴だと御立腹でもありませうが、二人が死なうとまで思詰めた事情を、よく〳〵だとお察し下すつて……然し何うして、私達が此方らへ來た事が分りまして？」と不審さうに聞いた。

「實は貴方達のお留守へ二度お訪ねしましてね、二度とも家が閉つてゐるから、不思議に思つて隣で聞いて見ても、一向隣でも樣子が分らん。私も蟲が知らせたか心配になつたものだから、其の足で河原さんのお勤め先きの塾長をお訪ねして見ると、つい今し方かういふ手紙が屆いたと言つて、貴方の手紙をお見せなすつた。讀んで見ると、是々の事情で、先生に御迷惑を懸けて濟まないから、二人が身を隱す、と云ふ意味だが、何うも其の文句が私には氣になつて、念の爲めに封筒のスタンプを見ると、藤澤とある。こりや片瀨か江の島か、何でもあの邊の海岸が氣懸り

だと思つたから、直ぐ出向いて、昨日から宿屋と云ふ宿屋を軒別に聞いて歩いたのです。片瀬でも分らず、江の島でも分らず、到頭鎌倉まで來て、今日夕方漸と八幡前の伊東屋と云ふので、宿帳の名前は違ふが、的きり貴方達に違ひ無いと突留めたものだから、夕飯を濟ましてお出掛けなすつたと聞いて、それこそ險難だと思つて急いで此方らへ搜しに來たやうな譯で……いや、それにしても實に危い處で、僕が來てもそれぢや間に合はなかつたのですね、荒尾君が通り懸らなかつたら……荒尾君、能く助けて上げてくれた、僕からもお禮を言ふ。」

「然うぢや、二百八十圓が助かつたのぢやでな、感謝しても可い。」と荒尾は冷かに言つた。

「君は誤解してゐる、そんな意りで僕は故々鎌倉くんだりまで追懸けて來たのぢや無い。」と貫一は怨めしさうに云つた。

「ぢや、どんな意りで來たのぢや。」

「お二人の命を助けたいばかりに、是でも隨分氣を揉んで來たのだ。」

「死なれたら、元も利も無くなるでな。助けて置いて氣長う又督るか。」

「荒尾君！」と訴へるやうに呼んで、「是だけは信じてくれ給へ。僅か二百や三百足らずの金で、一人ならずお二人とも死なうとまで決心されたかと思ふと、僕は貸金も何にも要らない、どうか生きてゐてくれゝば可いがと其ばかり、祈つて駈着けたので……現に此所に證書も持つてゐる。綺麗に棒を引いてお返しする意りで、鞄へ入れて持つて來てゐる。」

「ふむ、人並みの事を言ふな？」と荒尾は半信半疑の體であつたが、左も右くも紀雄に向つて、「河原さん、聞かるゝ通りぢや。眞意は知らんが、左に右くあゝ言ふのぢやから死ぬには及ぶまい。まあ安心して、貴方達は一足先へ伊東屋へ引取りなさい。僕も後から行く。」

紀雄は始めて甦つたやうに、

「どうも有難う御座います。何とお禮を申上げて可いやら……雪野さん、

貴方からも……」と促した。

然し雪野は、相變らず首を深く垂れたまゝ、死んだやうになつて顔も擧げなかつた。

「有難う御座います……さあ雪野さん、能くお禮を……」

「まあ宜しいから、宿へ引揚げなさい。僕は色々未だ此男と要談があるので。」

「はい。ではお話のお邪魔をしましても却て何で御座いますから、お辭に甘へて一足お先きへ失禮致します。何分とも宜しく……間さん、後程どうぞ御一處に……お待ち申して居ます。」

紀雄は雪野を促してイソ〳〵立去つた。雪野は其時も唯俛れ勝に會釋をしたばかりで、口も利かなかつた。彼女は命を助けられた嬉しさと云ふやうな表情は、終に見せずに去つたのである。

見窄しい二人の姿を月影に見送つた荒尾も、雪野の其の始終の樣子が

脳に落ちなかつた。曩二人を引留める時に投げ出した例の鐵鞭を拾ひ揚げて、旋て岩角に腰を下ろした。

貫一は立去る二人には目も與れず、片手を帶に、伏目になつて何やら深く物思ふものらしかつた。肉の落ちた横顔に冷たい月光を浴びて、シヨンボリと影も薄さうに見えた。

「間、今言うた事は君の本心か。」

「何が？」と貫一は始めて顔を擧げたが、頷いて「本心だ。二百や三百の金で命を棄てようとする人達に債務を强ひても始まらん。」

「何故か。」

「不憫で。」

「不憫と云ふ事を君でも知つて居るか。」

「是までは知らなかつた。然し先月末にも或る所で……是は僕の債務者では無いが、彌張り思合つた男と女が金に詰つて心中しようとするのに

打突かつて、其時僕も沁々感じた事がある。實際死の前に立つた者くらゐ人を動かすものは無い。死は眞面目だ、人間の誠と云ふものが人を動かさねば已まないのだ。」

荒尾は瞳を据ゑて、然ういふ貫一の顏を繁々と見た。

「人間の誠だの眞面目だのと、高利貸の言草には些と不似合ひのやうぢやが……然う聞けば僕も聞込んだ事がある。例の赤樫の女、彼の語に、君は鹽原とかで心中を助けて、金まで出してやつて、其上家へ引取つて二人を世話しとるとか。それなのか。僕は高利貸の所業としては物好き過ぐると、話した奴も話した奴ぢやから、何を言ふかと思うて信じもせんかつた。若し又事實なら、女は藝者あがりぢやさうなと、何れ又醜業婦に賣らるゝか……男は男で、高利貸の才取にでも使はれとるぢやらうと思うた。」

「豈かそんな……慾得盡くで助けた譯では無い。」

「不思議ぢやな。隨分首縊りの脚も引張りかねんやうな强慾非道の高利貸が、金まで出して人を助けて、其上家へ引取つて世話をする、それが慾得盡くでも何でも無い？」

「無い、全く人情盡くの好意なのだ。」と貫一は熱心に言つて、「僕が鹽原で助けた二人、それから今夜の河原さん夫婦でも然うだが、死ぬまで二人の間の愛情を變へない、二つ無い命を棄てゝも愛情を完うすると云ふ其の心意氣、それが僕には嬉しいのだ。君も知つてゐる通り、僕は宮に背かれた、それが動機で高利貸にまで墮落した、此前君にも盜人と言はれ、罪人と言はれ、又狂人とも畜生とも言はれたが、僕は腹も立てなければ悔しくも無かつた。又辯解もしなかつた。世上何人か畜生たり狂人たり、將た盜人たり罪人たらざるものぞ、と心で思つてゐたからで、處が圖らず鹽原で其の心中の男女に打突かつた時、僕も實は內心面食つたのだ。今まで一途にかうと人間なり世中なりを見てゐた僕の考へとは、

大分違つた除外例を見せられたので……かう言つても君は信じないか知らないが、僕は正直最う、宮に對して怒りも無ければ怨みも抱いてゐはせんよ。と云つて、今日僕が彼を許す許さんは別問題だが、左に右く彼が其當時の所業は人間として當然の所業だと思つてゐる。責られて怒つたり欺かれて怨んだりした僕の方が愚だつたと覺つたのだ、一體世中に永久變らない誠と云ふものがあると思ふのが間違で、人間には誠も無い。又僞りも無い、愛だとか情だとか云つた處で、それは冷め易い一時の衝動だ。成程愛情其のものは誠でもあらう。冷めない間は僞りでも無からうが、其の僞りで無い誠といふものも、或力の前には火の前の氷よりも脆い。所詮人間を支配するものは其の或力で……力と云へば權力乃至は金力！」

「其の金力の威力が君をして高利貸たらしめた？」

「然うだ。金力是權力、人間一切の事は金で決せられると信じた。然し金でも買はれないものが唯一つある。それは人の命だ。如何に金の威力でも死には及ばん、其の死を賭しても愛情に殉じよう、愛情を完うする爲めに命を棄てようとする者があるのを見ては、何うも其處に何ものゝ力も破るべからざる、人間の眞の誠と云ふものも認めない譯には行かなくなつて……」

「然うか、其處まで氣が付いたか！」と荒尾の聲は喜ばしさに躍つた。

「だから僕は……そりや時と場合に由りや首縊りの脚も引張りかねん高利貸だ、商賣の爲めには强慾非道も敢て爲る、世中の人間に對して決して義理や人情も厭つては居らん……けれども僕は、今後も然ういふ金で買はれる命だけは買つてやらうと思ふのだ。」

「能く分つた、宜しい。それなら君は、何故最う一歩進んで、生きながら葬らるゝ者の命を買うてやらん？ 命を棄つるばかりが死ぬや無いぞ。世間に君のやうな高利貸がある爲めに、適れ用ゐらるべき人才の多くが

名を傷け、身を誤られて社會の外に放逐されて空しく朽つるものは少なからんのぢや。心中するやうな彼輩の命は、死んで始めて亡くなる命ぢや。然し世に立ち社會の爲に爲すあらんとする人才の生命は、僅な一不名譽の傷でも、それが社會に生きられざる致命傷ともなるのぢや。貴い器は碎け易い。今日の人才を滅す者は、曰く色、曰く高利貸ぢやと嘗ても言うた。色情の爲めに心中する命を救ふなら、何故高利貸の爲めに葬られつゝある多くの人才の命も救ふてやらん？」

「救ふ！救はせてくれ給へ。」と貫一は思はず乗出して、「荒尾君、君も其の葬られてゐる人才の一人だ。何うか先づ君から救はせてくれ給へ。」

「馬鹿な！誤解しては可かん……」

「誤解では無い、君の言ふ事はそりや能く分つてるが……」

「いゝや。僕は高利貸に殺さるゝとも、高利貸に救はるゝ事は斷じて欲せん。同じく高利貸の爲めに落ちぶれて居る此の僕を氣の毒と思ふならば先づ君の爲めに惱まされ居る人才の多くを一層不憫と思うてやれ。」

「それも考へて見る。からして何うか荒尾君……君も爲すあるの材を抱きながら好んで然うして江湖に落魄してゐる譯でもあるまい。何うか君の身の立つやうに僕に助力させてくれ給へ。かう墮落して了つた僕の體は今更爲方が無い、切めて親友……と言つたら又慍られるか知らんが、左に右く昔は友人であつた、其の舊友の出世を仰いで、僕は……僕自身を慰めたいのだ。」

「分らんな！高利貸に救はるゝ事は僕の欲せん處ぢやと言うて居るよ。」

「だから、昔の友人として……」

「昔にも今にも、高利貸を友人には持たん！それに就いても、なあ間、同じ僕の身を思うてくれる其の對手が、昔の間貫一のやうな友であつたら、と僕は沁々思ふのぢや。君は墮落して了つたから今更爲方が無いと言ふが、何故爲方が無い？昔の間貫一に復れば其れで可いのぢや。」

「昔の僕に復る？そりや駄目だ、昔の間貫一は速うに最う死んだものだ。」と貫一は情無さゝうに首を掉つた。

「ぢやから甦へるのよ。高利貸を歇めて真人間に立復るのよ。」と荒尾は力を入れて言つた。「君は心中者を助けた、今又河原夫婦を助けようとした。人を助けて喜ばるゝと、高利を督つて鬼のやうに怨まるゝと、何ちが君は心持が好い？君が思うとつたやうに世中は無情なものばかりぢや無い、嘘や偽りばかりが人間の全部ぢや無い。誠と云ふものもある、死も辭せざる真の愛情もある、それは君も既に認めたのぢや無いか。畜生と言はれても平氣ぢやつた、世上何人か畜生たらざるものぞと思うとつた、君の其の考へは破れた。除外例を見せられたと言ふが、焉ぞ知らん、除外例と思ふのは其れは真人間の取るべき當然の道ぢや。君自身こそ除外例なのぢや、悲むべき除外例を味はうたのぢや。既に偽りならざる真の誠あるを知り、畜生ならざる真人間のあるを知つた以上、君も最う畜生を歇めたら何うぢや、人間の除外例から脱して真人間に立復つたら何うぢや。此前に會うた時にも、不正の金錢を積んで慰めらるゝ處があるかと聞いたら、君は慰められんと言うた、慰められんのは當前ぢや。病に藥を用ゐずして、却て毒を用ゐて居ると同じぢやものな。見い、人を苦しむると、人を助くると何ちが慰めらるゝ？」

「何ちも慰められん……」と貫一は苦しさうに呻いた。

「何ちも慰められん？なら、何の爲めに高利貸には命よりも大切な金錢を犧牲にしてまで助けた？」

「それは……曩も言つた通り、金で買はれる命を買つて見たいけだ。」

「ぢや、舊友の僕を出世させて、君自ら心を慰めると言うたのは？」

貫一が差俯いたまゝ何時までも答の無いのを、荒尾はジッと其顏を覗き込むやうにして再び口を切つた。

「弾張り金で買はるゝ荒尾を買つて見るだけか……いゝや、まあ聞け、

人を助くるも苦しむるも、双つながら君は慰められんと言ふが、然しちや、首縊りの脚も場合に由つては引張りかねんと自分で公言するぐらゐの君が縁も懸りも無い心中者を助けた、貸金を棒に振つてまで河原夫婦を助けようとした。一體君をそれまでに動かしたのは何か。究り君自身の涙ぢや。今日まで涸れも爲んで殘つて居つた昔の間貫一の血に外ならんのぢや。其血の動き、其涙の注がるゝ時、君の心は既に慰められて居らんければ成らん。他愛は則ち自愛、善を爲すの樂みは、爲さんと欲する其心自らが樂しいのぢや。君は強ひて自分を欺いとる！迷うとる！何うか覺めてくれ、覺めて本心の聲に聞いてくれ、心中者を助け、河原夫婦を助けた其の美しい涙、それを遍く世人に注ぐのぢや。僕を救うてやらうと云ふ昔の間貫一の血、其の暖い血を以て再び社會に接するのぢや。なあ間、敢て王侯將相にも膝を屈せん此の荒尾譲介が、此通り手を下げて頼む！斷然高利貸を歌めてくれ、な、眞人間に立復つて何うか昔の間

実に然り、改むべし

貫一に生れ變つてくれ……いや、生れ變るのでは無い。單に蘇生するのぢや、復活するのぢや。」

友を思ふの熱誠は溢れて、荒尾の其の目には涙が光つた。貫一はそれでも未だ返事は無かつた。小刻みに刻むやうに兩肩を戰かせて、垂れた首は一層低く垂れた。月は稍西に傾いて浪の音も高まつた。

「僕もかうして窮迫して居る際ぢや。君が救うてやらう、助力を爲ようと親切に言うてくれると、そりや涙の零れるほど嬉しくも思ふ。が、嬉しいに就けても心外なのは、然う言うてくれる君が昔の間貫一で無い事ぢや。君も僕も夙う親に別れて、同じやうに頼りない孤兒ぢやから、一生變らず助け合はう、互ひに固く手を取合うて進まうと誓うた昔の友、其の友の間貫一が、最う一度社會に打つて出ろ、身の立つやうな助力しようと言うてくれるのぢやつたら、僕は如何に感激したぢやらう。親友の其の志に對しても奮つて立たずには居れんのぢや。けれど間貫一は最

う昔のやうな友では無い昔の友と言ふさへ恥づる高利貸ぢや。其の恥づべく憎むべき高利貸の口から、昔の間貫一の言ふやうな事を聞かさるゝだけ僕は一層苦痛ぢや。つらからば唯一すぢにつらからで……慈ひ人がましい事を言うてくれるな！」と投げ出すやうに言つて、荒尾は其長い顎髯の顫へるのを扱いた。

「荒尾君！」と程經つてから貫一は始めて顔を擧げた。片手に目を小擦つて、「こんな淺ましい畜生のやうな奴を、能うく見棄てもせずに……昔の友人と思へばこそ……荒尾君、僕は嬉しい！泣くまいと思つても泣かずには居られん。自分ながら愛想の盡き果てたこんな奴を、墮落から救はう、眞人間に立復らさうと……あゝ、實に有難い！髮から骨身に沁みた。心魂に徹した。感謝する！荒尾君、僕は感謝する！」

「僕に感謝は要らん。それほど感じたら君自身眞人間に立復れ！」

「立復れ！」

「立復る？ぢや、今日限り高利貸を歇めるか。」

「歇める！必ず歇めて見せる。けれど、今は未だ……少し考へさせてくれ給へ。歇めるに就いては色々熟考しなければ成らん事もあるから。」

「そりや可かん。惡事を悔悟するに何を考へる必要がある？惡事を惡事と覺つたら、其惡事を歇めるに熟考も何も要りは爲ん。間、貴樣は何ぢやな。嬉しいの有難いのと空涙なぞ零しをつて、僕を瞞して此場を當座遁れしようと爲るんぢやな、いゝや、然うは成らん！」と荒尾の聲は鋭かつた。

貫一は忙しく手を振つて、

「それは飛んでも無い誤解だ。君の深切を空涙で瞞すなんて、貫一如何に墮落したればと云つて、そんな賣女のやうな眞似は決して爲ん、僕も此頃までの貫一とは違ふ、曩も話した通り多少考へも變つて來てゐる際だから、君の忠告も衷心から傾聽してゐるのだもの、歇めると口外した

以上は、誓つて歌める。からして、最少しの間待つてくれ給へ。」

「ぢやから、何故待つのぢや、實際廢める了簡なら直ぐ廢めたら可からう、廢めるに何の熟考が要る？」

「君は唯廢めるとさへ言へば、直ぐそれで高利貸の脚が洗へるやうに思ふのだが、然う手輕には行かんのだから……同業者間の關係も色々あるし。」

「そんな高利貸同士の關係なんぞ、眞人間になるのに何顧慮する？一切斷絶して了ふ分の事よ。」

「それに、永年營業して來た事だから、隨分手廣く取引もしてあるし、色々又混入つた事情もあるから……」

「と言ふと、君はそれぢや、貸金を回收してから廢めようと言ふのぢやな。」

「決して然うぢや無い、廢める以上は貸金の證書を一切反古にする！」と

屑く言つて、「債權さへ抛棄すれば片を付くのだから其れは可いが、唯貸金以外の僕の財産だね、僕がかういふ不正の職業で今日まで蓄積した不正の財産、何のくらゐの高か計算して見ねば慥かな事は言へんが左に右く意志の弱い人間の一人や二人迷はせるくらゐは有る。不正の道を以て集めるのは無論罪惡だが、然し又散ずる方法を過まつたら、却て社會を害するやうな結果にならんとも限らん、それでは罪惡に罪惡を重ねる譯で……不正に集めた金であるだけに、切めて僕は、其の罪を多少でも償ひ得られるやうな方法を講じたい。」

「成程。」と荒尾は頷いて、「金といふ奴何處まで厄介な奴かな。して見ると、僕のやうに無いのも亦氣樂か。」と苦笑ひをした。

「其の方法を講ずるに就いては、是非君にも相談に乘つて貰はねば成らんので。」

「そりや乘らうとも。集むる事には不得手ぢやが、金を散ずる事なら何

とか僕にも考へられん事はあるまい。ぢやが、其の問題は他日の懸案として置いても、君が高利貸を歇めるに差支へは無からう。要するに僕は、然ういふ面倒な問題は措いてぢや。唯君が高利貸を歇める……歇めるでは無い、歇めたといふ宣言が聞きたいのぢや。」

「では、僕も君に聞いて置きたい一條件がある。」

「何か。」

「僕が不正に集めた金を、正しく用ゐらるゝ方法の中の一つに、必ず君と云ふものが加はつてゐる事を、豫め承知して置いて貰ひたいのだ。」

「多謝！君が高利貸さへ歇めたら……」

「では、歇めよう？」

「歇めようでは無い……」

「歇める、いや、歇めた！此場限り斷然歇めた！」

「歇めた？」

貫一は強い決心の色を見せて頷いた。

「おゝゝ復活！」と躍り上がるやうにして荒尾は行きなり貫一の手を握つた。

二人は聢と手を握り合つて顔を見合せた。涙は二人の頰に留度無く流れた。

「荒尾君！」

「間！」

「長あい、厭な夢だつた！」

「夢は覺めた。ぢやが、覺めても君の世は寂しい……。同じ寂しさを泣いて居る者が、彌張り夢から覺めて、未だ一人ある……知つて居るか。」

貫一は唯微かに首を掉つた、軈て握つてゐた手を放すと、彼はツカツカと岩鼻に進み出た。而して鞄の中から幾束かの貸金證書を攫み出して、バッと海に投げ込んだ。退き懸けた潮は見る間に其れを運び去つて、月

光の煙れる浪間に隱して了つた。

感極て涙数行

第六章

早稲田の西、諏訪神社の森を背後にして、植木屋、片手間の農家が五六軒並んで、梅も散つて、稍春らしい和かな日影の中に蓮翅の黄色い花が咲いた、苗木の沈丁も莟を破つて清しい薫りを送つた。躑躅、滿天星南天、楓といつた類の挿木や接木の植込まれた奥に、藁葺きの離屋めいた一棟があつた。グチャ〳〵に濘つた霜解けの路地を入つて、格子戸の立つた門口に「荒尾」と手書した名刺ほどの紙札が張出された、彼は去年の冬以來亮一を連れて鎌倉に行つてゐたが、森の連中と時々顔を合せるのが煩く、それに氣候も幾らか春らしくなつたのを幸ひ、急に東京へ歸つたのであつた。

彼が生活の資としては、或る官省の佛文の翻譯であつた。それは愛知縣へ赴任前内務省に奉職した當時の同僚が周旋であつた。荒尾自身には

敢て利益になる勞作でも、興味のある爲事でも無かつた。唯一枚幾らと云ふ翻譯料の爲めに筆を執るので、金に窮すると一氣に三十枚五十枚と譯しもするが、不斷は原書も机の上に閉されたまゝ埃が積つた。

去年鎌倉へ行く前は、母屋の植木屋で飯だけ焚いて貰つて、亮一を對手に荒尾自身菜拵へなどもした。其中に亮一は體が惡くなつて、買物の使ひ歩きも出來なくなつた處から、餘儀無く近所の辨當屋から三食を運ばせた。無論旨くは無いが、手輕で面倒が無い爲に、鎌倉から歸つてからも引續き辨當飯で濟ました。

二疊の玄關と四疊半の茶の間と、外に六疊の一間を荒尾の書齋ともし客間ともした。一間の押入に三尺の置床めいたものが附いて、其所に例の相州物の一口が立て懸けられた。掛物も何にも無い、唯口を抜いた西洋酒の壜が二本まで並んだ南向きの縁側に近く一閑張の机が二脚、金文字背皮の洋書と、インキ壺と、原稿紙と、讀み殼の新聞紙とが亂雜に載せられた。荒尾は毎も其の机の傍にコップを置いて、強い西洋酒をチビ〳〵嘗めながら筆を執るのが例であつた。

日當りの好い縁側には、蒼い顔をして首にハンカチを卷いた亮一が、日向ぼつこをしながら學校の教科書を小聲で溫つた。何處でか鶯の囀くのが聞える。

荒尾は今まで書いてゐたペンを擱いて、

「亮一、今朝藥を服んだか。」

亮一は本を伏せて、首を掉つた。

「何故だ、自分の體を大切に思はんか。さあ、直ぐ服むのぢや。」

「藥最う無いの、昨日服んで了つて。」

「ぢや、又買つて來なければ可かん。次手に今日は體を見て貰ふやうに是から直ぐ行つて來い。」

亮一は教科書をズックの雜嚢に收めてそれを持つて玄關へ行つた。虛

の藥壜を片手に、闕際から、

「ちや、行つて參ります。」と挨拶した。

「うむ、體を見て貰うたら、醫者が何と言ふかを能う聞いて來い。」

亮一は學校の徽章の附いた學生帽を冠つて露地を出て行つた。

「鎌倉に居る間は、大分體も恢復したやうぢやつたに、此方らへ連れて歸つたら又何うも良うない、困つたものぢや。」

出て行く亮一の後影を見送つて、荒尾の顏は曇つた。旋て書き溜めた机の上の翻譯を取つて、紙數を數へて、

「先づ是で當分の凌ぎはあると……高等中學で物好き半分にやつた第二語學のフランス語が、今日己れの唯一の飯の種にならうとは……妙なものぢやな。どう、今日中に屆くやうに……」と獨言ちながら、それを紙捻で綴ぢて大形の封筒へ入れた。

「御免下さい。」と玄關の格子戸の音がする。

荒尾は封筒の上書きを書かうとして取上げたペンを控へて、

「誰？」

「荒尾さんと仰しやるのは、此方樣で？」

「然うです。」

「些つと御主人にお目に懸りたくて伺ひましたが……」

荒尾はペンを擱いて玄關へ出て見た。土間には知らない老人が立つてゐた。

年は六十を一つ二つも踏出したらしいスッペリと禿上つて頭に半白の髮が薄く殘つて鬢も八分通り白かつた。老人らしい溫厚な顏をして、風采も卑しくなかつた、細かい節糸の綿入に鐵無地の羽織を着て、黑羅紗の外套と、白縮緬の首卷を左手に抱へた。荒尾の姿を見ると、右手の帽紗包みと帽子とを上框に置いて小腰を屈めながら、

「手前は、鳴澤隆三と申す者で御座りますが……」

「鳴澤さん？」

「最う古い事で御記憶も無いか存じませんが、以前間貫一と申す者が宅に居りました頃、折節御主人にもお目に掛りまして……」

荒尾はハッと思當つたやうに、

「然うぢや！　悉かりお見逸れして失禮しました。僕荒尾です、何うぞお上り下さい。」

主客座に通つて、一通りの挨拶が交された後、隆三は帛紗包みの手土産を出したりなぞした。

荒尾は隆三を見忘れたのも無理は無かつた。彼が未だ高等中學に在學した當時自分の同窓の親友が寄人となつた其家の主とし、其親友の許嫁の父として、僅に數へるほどしか會つてはゐなかつた。然し此老人こそは自分の娘を富に替へ養ひ子の好青年を棄てゝ、然かも二人ながら、自譽の淵に墮落し狂亂せしめた間接の下手人である。荒尾は老人の其の

白い髮毛の赤くなるまで、責め且つ恥しめても慊らなく思つた。けれども、有繋に又老體と云ふ事も憚られた、初對面と變らないほど面識の淺いと云ふ事も躊躇をさせた。何の用で來たか、何を言出すか、左も右くも其れを聞いた上でと考へ直した。

隆三は又隆三で、荒尾の名に由つて期待した處と餘りに違つてゐるのに內心驚いた。高等中學時代に貫一が兄事した學友の荒尾は、同じ年頃の青年には稀しいほど落着いて、而して聡りした人物であつた事も記憶した、若氣の一徹に任せて飛んでも無い方へ墮れて了つた貫一なぞとは遙ふ。今日では學も成り業も遂げて然るべき地位も得、恥かしからぬ生活もしてゐる事とのみ思つて來た。處が、二間か三間の此の弊屋で、何うやら妻子も未だ無いらしく、一見浪人暮しとは知られた。餘りの意外に彼は、自分の今日齎して來た用件を言ひ出すのも遲らはれたくらゐである。

「えゝ、手前今日お伺ひしましたに就いては、色々内密な事情もお打明け申さねばならんやうな次第でありますので……貴方で御座りましたかな、高等中學で間貫一と御同窓の、其の荒尾譲介さん？」

「然うです、其荒尾です。見らるゝ通り貧乏暮しはして居るが、昔も今も荒尾譲介は變つて居らんですから、御懸念無うお話し下さい、何ですか。」と荒尾は老人の其の疑ひ立てを苦笑して言つた。

「いや、懸念の何のと、然うお取り下されては恐縮ですが……實は娘の事で、成るべく内密に御意得たいと思ふものですから、つい大事を取りまして……」

「娘さんと言はるゝのは、富山へ行つて居らるゝ宮さん？　成程、御用向きは彌張り然うでしたか。いや、懸違うて貴方には今日までお目に懸らんかつたが、宮さんには昨年些つと僕も逢ひましてな。色々變つたお話も伺うたが……貴方にはそんな話も宮さんからお聞きは無い？」

「それは〳〵。私達には更ばり話もありませんものですから……然やうで御座りますか、娘もそれでは此方らへ伺びましたので？」と隆三は意外らしく眉を顰めた。

「いゝや、假にも富山の令夫人が、かゝる賤が伏屋へ……なか〳〵、そんな輕卒な事のあるべき筈も有りませんぢや。」と荒尾は冷かに打消したが、「唯偶然途中でお目に懸りましてな、それでも荒尾の髯面を忘れて了はれも爲んかつたと見えて故々引留めて……僕も色々お話を伺ひましたぢや。其際僕の此の變つた體たらくを宮さんも驚かれたが、宮さんも亦色々變つた事情も有らるゝやうで、僕も貰ひ泣きをしましたぢや。」

「然やうで御座りましたか、それから彼女の事情なり胸中なり、何れは最う本人からお耳に入れた事と存じますで、其上手前が冗うは申上げるにも及びますまいから……處で、唯お聞きが願ひたいのは彼女も到頭發狂をしましてな。」

「ほう、然やうか？」と思はず色を變へた。

「尤も其前から妙ではありました、折々突飛な事を申すかと思ふと、夜も晝も始終部屋に鬱ぎ込んでばかり居ましてな。然し醫者の方で、可い加減にヒステリーだとか神經衰弱だとか申して、手輕に診斷を下してゐましたものだから、傍の者も豈かに發狂しようとは存じも寄りませんで……私も彼女が精神錯亂致した處を始めて見ました時には、いや最う、仰天して了ひまして、泣くにも泣かれん心持で御座りましたわい！」

「御尤もぢや、それで今は何らに？」

「小石川の腦病院へ入院させて御座りますが、幽鬱性精神病とか申して……何うも恢復するにしましても永いさうで。」

「幽鬱性と云ふと、發揚性のやうに、他には危險を及ぼさんさうぢやが……で、宮さんは何んな風でお居でかな？」

「それですて！何よりもお聞きを願ひたいのは其れで……平常先づ發作の無い時で見ますと、チッと唯默り込んで俯いたまゝ、一日でも二日でも決して口を利かうとは爲ませんので、申さば氣抜けも同樣、それは然し始末が宜しい時で、困るのは發作の發つた時ですわい！何かかう樣々な物が目に見えるものと見えまして取留めも無い事を口走つては、正體無く泣いたり笑うたりしますのが、誠にはや見てゐるに忍びん淺ましい體たらくでありましてな。いや、淺ましいのは未だ宜しい。親の私が見てゐて慘らしうて成りませんのは、お聞き下さい、娘が然うして泣いたり笑うたりして狂ひ騷ぐのが、皆な最う貫一の事で御座りますものぢや。外の者の事は、親の事も夫の事も嘗て一度も口にしたのを聞きませんので……。唯貫一に濟まんとか、貫一に申譯が無いとか、發狂以來全で貫一の事ばかり言ひ續けてゐると申して可いくらゐ……荒尾さん、彼女の發狂は全く、貫一の事ばかり苦にした餘りで御座いますわい！現に其爲めに二度まで自殺を……」

「自殺を？」

「二度までも爲懸けて……尤も氣違ひの事でありますから、傍でも注意をしてゐまして、二度ともまあ大事に至らずに濟みましたが……彼女の意りでは、死んで貫一に詫びする意りと見えましてな、手前や媼さんの顔さへ見れば、死にたい、死なせてくれ……、いや許して貰つてから死ぬ、許して貰はなければ死んでも死ねないなぞと申したり……外の事は更ばり何にも分らんのに、それだけを唯一途に思詰めた氣違ひの心根を思ふと、荒尾さん、私は慘らしくて成らんのですよ……」

話す中にも隆三は胸が迫つて、幾度びか顔を背向けては鼻ばかり去んだ。荒尾も默然と目を塞いで、慰むる辭を知らなかつた。

「荒尾さん、其處で私の今日かうして突然伺ひましたと云ふものは、外の儀でもありませんが……如何でせう、貴方の一つ御盡力で以て、娘に一度、貫一を會はせてやつて下さる譯には參らんものでせうかなあ。」

と隆三は憫みを乞ふやうな目附きをして、「實は、昨年貫一が闇撃とかに遭うて、怪我をして入院したと云ふ新聞を見まして……それで始めて家で出後の彼男が消息も知りましたやうな次第で……其際私も見舞を兼ね久方振に病院へ訪ねて行きました處が、いやもう、寄つても着けない脈で……然う〳〵、其時で思ひ出しましたが、貫一には何か、妙な女でも附いて居はしませんか。」

「妙な女……」と荒尾は訝しさうに、「と云ふと？」

「其時名刺も貰ひましたが……えゝと、何でも赤木とか赤何とか云ふ姓で、名は慥か滿枝……」

「あゝ、そりや赤樫滿枝と云ふ者です。同じ金貸仲間で……何樣女の方からは頻りと間を籠絡せうと爲るらしいが、異性間の然ういふ方は他くまで間も潔白で通して居るらしいです。彼も女では一度最う懲りて居りますぢやでな。」

隆三はチクリとしたやうに目を瞬いた。

「で、折角訪ねて行つても然ういふやうな始末で、此方らが幾ら折れて出ても、貫一の方で打解けてくれる心が無いのでありますから、何うにも、はや致し方が無くて……永年睦まじう一家族で暮した者が、僅かな誤解や行違ひで音信不通になつて了ふと云ふのは、私も誠に殘念に思ひ〳〵今日まで居ました。處が、今度又娘が然ういふ始末でからに頻きりと貫一に逢ひたがるものですから、一つは是を好い機會に仲直りかして貰ひたいと思ひましてな。それも然し此方らだけの考で、彼男の腹は何うであらうか、昨年病院へ訪ねて行つた時の險脈から推して見ても、今度も容易に承知はしまいと思ひましたが、承知すると爲ないは二の次にして、左に右く會ふだけなりと會うて貰へば可い意りで、昨日と今日と二度三番町へ行きましたが、二度とも留守で……私に會ふのを嫌つて居留守を使ふのかとも思ひましたが、今日取次に出た留守居の者の口上には、戸塚の荒尾さんへ廻ると言ひ置いて出掛けた……荒尾さん？はて、荒尾何と仰しやると聞くと、荒尾讓介さん……高等中學時代に能く貫一の處へ遊びに見えた貴方のお名前では有りませんか。娘が前に最うお目に掛つてゐる事は存じないものですから、こりや貴方にお縋りするのが早道だと始めて氣が付いて、それから急に此方らへ廻りましたやうな次第で……荒尾さん、お察し下さい。私は最う六十の上、媼さんとても是亦五十の定命も大分踏み越してゐますのだ。折角老後を懸らうと思うた貫一はあの始末、其處へ以て一人きりの娘は、氣が違ふ。此年になつて何たる憂目を見る事か、泣くにも泣かれんで、私も媼さんも唯もう途方に晦れてゐる有樣……お察し下さい。」

「お察しする。お察しは爲ますぢやが……」荒尾は組んでゐた腕を靜かに解いて、「然しぢや、御老人に對して言ひ憎い事ではあるが、忌憚なく言はうなら、貴方達の今日あるのも、究りは自ら招かれた結果に過ぎん

ちやらうと僕は思ふ。宮さんが精神上の苦悶に破れて氣が狂うたのも、間があゝいふ意外な方へ墮落したのも、其の責は半ば貴方達にもある。慥かに有る！何故と言はるゝなら、彼等二人がかうなる最初の其の踏出しぢや。何れも未だ血氣定まらん若い者で、心も迷ふ無分別も發る、貴方達御夫婦が附いて居らんなら知らぬ事、傍に附いて居られて何故其時迷ひを覺ましてやらうとは爲さらんかつた。ずりや、貴方達次第で、發すべき無分別も發さんで濟んだも知れんのぢや。貴方達が必ずしも、彼等二人を今日あらしめたとは僕も言はん。が、少まくとも彼等に今日あらしめた其の踏出しの第一歩をですぢや。貴方達が默つて見過したと云ふ罪は免れんと思ふ。」

隆三は禿げ上つた額をソッとハンケチで拭つて、

「誠にはや、面目次第も無い仕儀で……貴方から然う仰しやられて見れば申しますが、實は今日になつて、始めて私も六年前の過ちを覺りましたやうな譯で……媼さんにも誰にも未だ口外はしませんが、飛んだ何も取返しの付かん考違ひをして了うた。いや、間違うてゐたわい、と沁々今度は思ひましてな、有やうを申しますと、私は貫一の爲打を怪しからず立腹しました。娘との約束こそ反古に爲たれ、私の方では決して彼男を棄てたのでは無い。僅かな物ではあるが、鳴澤の家も讓らう、望みなら洋行も爲せようと云ふのであるからして、是まで育てゝやつた義理も思ひ、能く〳〵前後の事も考へて見たら、私達の顏も立てゝくれて然るべきであらう。それに何ぢや、面當てがましい今日の有樣、憎い爲打だと、まあ然う腹で思うて此頃までゐました。處が人間と云ふものは身勝手な薄情なもので、貫一のあの思切つた變りやうを見ましても、淺ましいとは思へ、決して可哀さうなと云ふ氣が私には發りませなんだ……人間の薄情と申すのは其處で……すると、それ、自分の娘が今度、あゝいふ情無い事になりました、親身であるから沁々娘を可愛さうと思うてか

らに、さて貫一の事も考へて見ると、始めて彼男の可哀さうなと云ふ其の眞底が汲めました。何と身勝手なものでありますなあ！」

荒尾は難しい顏をして頷いた。

「私は彼男との約束を反古にする際、二人とも若い者の事である、當座は厭な心持も爲ようが、何に其中には氣も變らう忘れる忘られんも一時の事だ、とかうまあ高を括つて手輕に考へましたものだ。しますと、貫一があの始末でありませうな、私は呆れもし、苦々しうも思うたと申すのは、娘でさへ思切り好う分別を爲替へたのに、男たる者が何時まで未練を殘して、自暴か面當てか知らんが、自分から身を墮して、眞人間に出來ないやうな淺ましい眞似までするとは、見下げ果てた了簡だと、全く然う思うてゐました處が、能う思切つたと思うた娘が、決して思切つたのでは無かつた。自分では分別を爲替へた意りであつても、それが出來ない證據には、到頭娘は其爲めに氣が違うて了ひましたので……二人の心は私の思うたやうに、其當座だけで濟むやうな淺々しいものでは無かつた。能く〳〵根底の深いものであつたと今更氣が付いて見ますと、貴方の仰せの通り、年寄が傍に附いてゐて、其處まで目の至らなかつたのが殘念此上も有りません。いや殘念は左に右く、人樣に第一お恥しい……と申すのは、私達年寄が目が至らなかつたと言ふと聞えが可いが、其實目が眩んでゐましたので、其時は然うばかりにも思ひませなんだが、今から正直に考へて見ますと、お恥しい話ではあるが、富山の財產家と云ふのに目が眩んだものと見えまする、年効も無い、私も媼さんも。」

「而して、宮さんも。」

「然うです。ですが……なあ荒尾さん、年寄の私達でさへ其れでありますもの、娘が偶と其氣になつたのも無理は御座んすまい。然し其爲めに苦しみ苦しんで、到頭氣違ひにまでなりました。氣違ひにまでなつて、貫一に濟まなかつた事を悔んでゐるのでありますから、貫一も最う赦し

てやつてくれても宜しいではありますまいか。但し又、それでも未だ憎しみが消えない、怨みが解けないと云ふ事なら、致方が無いからして、唯貫一が顔だけ見せてやつてくれゝば可いので、荒尾さん、御無理なお願ひか存じませんが、貴方にお縋りするより最う法は無いのであります から、氣違ひの彼女が心根を可哀さうと思ひ、私達年寄夫婦の胸中を不憫と御推察下されたら、何うか一目なりとも、貫一を娘に會はせてやつて下さい、親子三人が何んなに有難く思ひます事か……お願ひで御座ります！」

隆三は半白の頭を下げて唯只管に哀願した。荒尾も年老いた人に然うされるのは有繋に心苦しく強ひて頭を擧げさせて、

「そりや貴方の御胸中は、十分御推察しますぢや。僕も間に代つて言ひたい事もあるが、最う何にも言ひますまい。貴方も過去の非を認めて、自ら恥を明かしてそれまで、言はるゝと云ふものは、能く〳〵の事であらうとお察しする。からして　僕は貴方の其の白い頭に對しても敬意を拂ふべく、な、過去を問ふなかれ！　此一語を以て、貴方に對する一切を必ず間に諒と爲せますぢや。然し、間を宮さんに合はせてくれいとのお賴み、それは些と僕には出來かねる。」

「出來ませんか……なあ。」

「昨年宮さんに逢うた際にも、色々とお賴みであつた。間に取成してくれい、詫も言うてくれい、それが出來なければ唯間に合せてくれい、假ひ間が赦してくれんでも、彼に會うて目の前で思ふ存分謝りさへしたら、其の場で殺されても可いと、そりや熱心にお賴みぢやつた。が、僕は然し思ふ所があつてお斷りしました。宮さんの悔悟、そりや僕も能う認めるし宮さんの其の切なる胸中も察せんでは無いが、それを察するからには、一方又間の胸中も察せにやならん。而して何れか多く憫むべきかと言へば、間の無念は恐らく宮さんの苦痛の十倍するぢやらう。未だ〳〵

宮さみは苦しみが足らん。赦さるべく悔悟が淺い。とかう思うたから、僕は涙を隱して素氣無う其時はお別れしました。間に對する友人の義として、僕は宮さんを赦す譯には未だ行かんかつたですものな。然し數奇なる宮さんの運命は其時と又進んだ。悔悟に繼ぐに悔悟、苦痛に加ふるに苦痛を以てした結果が、今日の精神錯亂。それまでに至つたものを猶且つ責むると云ふのは、そりや涙を知らん冷血動物ぢや。僕も冷血動物になりたくない。間も冷血動物に爲せたう無い。宮さんに對する間の怒り、間の怨み、間の憎しみ、それ等は誓つて僕が解かせにや措きませんぢや。必ず解かせます！　解かするとと僕が誓うたからには、貴方も最う安心して、貫一は赦したと、歸つて宮さんに言うて上げて下さい。貴方は未だお知りはあるまいが、間も今度改心しまして、六年間の非を悟つて、彼も到頭眞人間に立復りましたぞ。」

「眞人間に？」　隆三は訝しさうに、「貫一が六年間の非を悟つて、眞人間に立復りました？」

「然う。潔く改心しました。」

「何う改心しましたので？」

「六年前の間に立復りましたのぢや。今までの不正な職業を廢して了つて、最う高利貸の脚を洗ひましたのぢや。」

「そりや、あの全くの事で？」

荒尾は然も會心らしい微笑を浮べて、長い下髯を靜に扱きながら、

「全くですぢや、嘘のやうに思はるゝぢやらう。あれ程根底の深かつた間の墮落が、然う容易う改心の出來るものでは無い、嘘のやうぢや、嘘のやうぢやが、全くですぞ。眞人間に立復つて、立派に高利貸の脚を洗ひつゝありますのぢや。是まで多くの人を苦しめた其債權を一切拋棄して了うて、其上手許に貯蓄した財産までも、それ〳〵方法を以て、社會人類の有益なる事業に喜捨する。僕が現に其處分法の相談に預つて居る

のぢやで、こりや最う慥かな事實！で、間も今までの高利貸の間で無い。眞人間に立復つた、人一倍血もあり涙もある昔の間貫一であるからして、今日の宮さんの悲痛なる悔悟を、怎や彼も容れずには居られまい。必ず赦すに違無い。宮さんは最う許されたものぢや。歸つて宮さんに然う言うて上げて下さい。荒尾が引受けたからには安心なさいと、な。貴方が折角僕を見懸けてお來でぢやのに、唯お歸しするのも御氣の毒と思うで、宮さんへの土産に、是が僕の寸志ですぢや。」

「は、有難う御座ります、貴方の御好意は歸つて早速娘にも申聞けます、それを聞きましたら、本人始め媼さんまでが、どんなに心强う思ひますか知れません。」と然う言ひながらも、隆三は物足りなさゝうに、「ですが、貴方も然うまで仰しやつて下さるものなら、其處を最う一歩御同情をお寄せ下されて、何うか一目、貫一を娘に合はせてやつては戴けないものでありませうか、なあ、荒尾さん。貫一も然うして最う涙のある眞人間に立復つたと云ふ事でありますなら。」

「僕は又、然うなつた間であるからして仍更宮さんに會はせ憎いです。以前の間なら何に管ひは爲ません。彼自身さへ承知なら、勝手に會はうと何うせうと、僕は冷かに傍觀するのみぢや。」

「それは又何故ですな？以前の間なら……究り高利貸の貫一なら管はないが……眞人間になつた間であつて見ると……、娘に會はされないと仰しやるので？」

荒尾は頷いた。

「しますと、娘に會つては眞人間の道にでも缺けますので？」

「何うですぢやらう、缺けは爲ませんかな？」

「何故缺けますだらう？」

「お分りが無い？」

「分りませんなあ……」

「お分りが無ければ爲方が無い。」と荒尾は投出すやうに言つた。

隆三は思案に晦れた。荒尾の言ふ事は一々理義が通つて、然かも誠意と同情とが其間に籠つた。曩から深く其の人爲りに推服もしてゐるだけ、其人の意味ありげな辭を隆三も假初に聞き流す事は出來なかつた。彼は腕を組んで獨り打案じた。

荒尾は暫く其の樣子を打戍つてゐたが果しも無いので、机の上のペンを取つて原稿を封入した其上書きの宛名を認めた。

「飛んだ何うもお邪魔をしました……」と隆三は氣が付いて言つた。庭前の日射しを見遣つて、「最う十二時になりませうな?」

「然う、追付けなりませう。時に鳴澤さん、僕は噂に聞いたのぢやが、富山の邸には、最う宮さんの代りが出來て居るとか……そんな事實があるですか。」

「さあ……私も委しい事は知りませんが……赤坂の何とやら云ふ女が、つい先頃から邸へ入り込んで居ますとか……」

「矢張り事實ですか、ぢや、然ういふ代りが出來て見れば、宮さんは最う富山の家には用の無い體……」

「と申す譯でもありますまいが、何しろ娘が入院すると直ぐ後へ、然ういふ者を引入れたのでありますからな。溫さんなぞも恐ろしく腹を立てまして……尤も當今の紳士といふ者は皆あゝかは存じませんが、私は殊に、唯繼と云ふ仁は……」

「然うでせう、然うあるでせう。貴方などと肌の合ふべき筈が無いのぢや。今日まで合せて居られたのが寧ろ不思議ぢや。其の不思議が究り宮さんを發狂せしめたので……どう、其處まで御一處に出ませうか、僕も郵便を出しに行かうと思うで。」と荒尾は机の抽斗から郵便切手を出して原稿の封皮に貼つた。

「おゝ、これは何うも……お邪魔とは存じながら、つい何うも……失禮

いたしました。では荒尾さん、冗う申すやうではありますが、何うあつても、貫一を娘に會はして遣つて下さる譯には參らんで？」

「鳴澤さん、貴方も御老人に似合はん……考へて見たら何うです？」

「ですが、何う考へて見ましたら？」

「宮さんは何です？　富山唯繼の妻ですぢやらう。」

「ですが……」

「ですがぢや無い。人の妻たる者の處へ、夫の許しも無うて男が近けるものと思ふですか。縱んば近き得るにもせい、假にも富山の妻たる名義を持つた宮さんに對してぢや、眞に宮さんが滿足さるゝやうな辭なり行爲なりが、果して間に出來得ると思ふですか。まあまあ、今日は貴方お歸りなさつて、能う一つ考へて見らるゝがえいです。」

荒尾は封書と帽子を持つて立つた。隆三も餘儀無く續いて立つたが、玄關を降りて、格子戸の閾を跨ぐ時、ハタと膝を叩いて言つた。

「いや、分りました！　成程これは仰しやる通りで……荒尾さん、分りました。是れから歸りまして、今日直ぐにも道を附けて改めてお願ひ申しませう。ですが、富山の妻で無くなりさへしましたら、貫一は快う娘に會つてやつてくれますだらうか。」

「會はんと言うても、其時は僕が會はせます！」と荒尾は後から格子戸を閉めて出た。

「屹度貴方が引受けて下さる？」

「引受ける！」

「では、明日にも貫一をお連れ下さるやうにお願ひ申すか知れませんが……」

「宜しい、今夜にも間の方は納得させて置きますぢや。」

「有難う御座ります。あゝ、これで安心しました！」

其二

隆三と一處に荒尾は家を空けて出て行つた。屑屋も滅多に立ち廻らないやうな町離れた郊外の佗住居は、留守の心配も要らなかつた。障子も閉めずに、開け放つた部屋の中へ午に近い日影が麗かに射し込んで、雀子が疊の上を漁つた。母屋の家族は朝から畝打に出拂つて、一人殘つた爺さんが植木の手入れをする木剪の音が、チャキリ、チャキリと間を置いては聞える。

亮一は藥罐を片手に歸つて來た。途中で一處になつたものらしく、午の辨當を二本小脇に抱へた辨當屋の女房が、後から附いて來た。

亮一は玄關から上つて、「只今」と聲を懸けたが答へは無かつた。茶の間から臺所を覗いて見て、

「居ない……」

「留守？」と女房は庭の木戸越しに、「何所へか出掛けたの？」

「曩、僕出る時には家だつたけれど」

「ちや、屹度又早稲田の正宗ホールだよ。お辨當の來るのが待てないんで、午飯の代りに一杯やらかしに出掛けたんだらう。」と女房は木戸を入つて、持つて來た辨當を縁側へ置いて、「本當に暢氣つたら無いね、こんなにお座敷も何も開放したまんまでさ。毎もかうなの？」

「あゝ、毎もかうなの。」

「呆れたお髯さんだね、ちよ！留守ちや爲ようが無い、ちやお歸りだつたら、忘れずに坊ちやん然う言つておくれ。後月の十五日から此方らの分が未だ貰はずにあるんだからね、今日にもお拂ひを願ひますつて、可いかね。辨當屋なんてものは資金が薄いんだからね、現金で無けりや繰廻しが付かないんだから……二本づゝ一日に三度だから、合せて六本の辨當だもの、それを十五日も二十日も溜めて貰つちや、辨當屋が辨當も

食へなくならあね。可いかね、是非お拂ひを願ひますつて言ひ置いたつて、忘れずに然う言ふんだよ。ぢや、臺所に廻つて空いた箱を貰つて行くよ。」

言ふだけの事を獨りで喋つて、辨當屋の女房は歸つて行つた。

亮一は藥罐の藥を一口服んで、それから學校用具を入れた雜嚢を持ち出して、緣先きで又教科書の復習を始めた。

今まで啼き連つてゐた藪鶯の聲がパッタリ歇んだと思ふと、横町の生垣に沿つた砂利道を俥の軌る音がした。俥は此處の露地外に留つて、霜解けの濘りを空氣草履で拾ひ〳〵入つて來た婦人があつた。細かい縱横格子の消炭色の縞阿召に、羽織は高等がつて黑。時計の金鎖と、薄絹金具のバッグを提げた。庭木戸の外からチラと亮一を見遣つて、ニッコリしながら、

「先生は？」

「留守なの。」と亮一も笑顔をして言つた。手袋を透かして兩手の指環のキラ〳〵した貴婦人作りは、例の赤樫滿枝であつた。コートは俥へ脱いで、空色のスカーフだけ纏つた。雪のやうな白の絹足袋に青磁色の裾廻しの袍を打たせて、手に銀金具のバック。

「然う、困つたわねえ。お歸りは分らない事？」

「散歩かも知れんの。」

滿枝は小形の金時計を出して見て、

「ぢや、暫くお待ちして見ませうね。」と言ひながら、木戸を開けて緣先へ廻つた。

亮一は氣を利かして、自分が敷いてゐた座蒲團を薦める。

「有難う。次手にお火を一つ貸して頂戴、煙草の。」と細い金烟管を出した。

亮一は茶の間へ立つて行つた。滿枝は座蒲團を敷いて緣側へ腰掛けて、

偶と其所にある教科書を手に取つた。幼い手迹で裏表紙に書いた其字を讀んで、

「宍原亮一……宍原……少い苗字だが、あの子の苗字か知ら?」と訝しさうに獨言ちた。

間も無く亮一は麁末な煙草盆を持つて來て、

「火は無いの。マッチぢや可けない?」

「結構よ、拜借。」

滿枝は煙草盆を引寄せて、先づ二三服靜かに燻らした。

「坊ちやん。」と煙管を拂いて、「これは、坊ちやんの御本?」

亮一は頷いた。

「此の裏の表紙の字は、坊ちやんが書いて?」

「えゝ、字は僕下手なの」

「何と讀みますの?」

「宍原亮一。」

「宍原亮一、坊ちやんの名前なんですね、でも此方らの小父さんは荒尾さんと仰しやるのに、坊ちやんは宍原、苗字が違つてね。」

「僕のお祖父さんの苗字なの、宍原つて云ふのは。」

「お祖父さんは、宍原何と仰しやつて?」

「宍原亮吾。」

「宍原亮吾!」滿枝はサッと色を變へて持つてゐた本を取落した。其の美しい頰は紅く燃え、清しい目は鋭く輝いて、ジッと亮一の顏を見詰めながら、「それで、其のお祖父さんは……何うなさいまして?」

「病氣で死んだの。」と亮一の聲は曇つた。

「えゝ! 何時?」

「去年……」

「まあ!」滿枝は見張つた其目を、急に又數瞬いて、「お亡くなりなすつた

んですか、まあ！一體何處でお亡くなりなすつたの。御病氣は何でしたの？」

「心臟が好けなかつたの、お祖父さんは名古屋の縣廳の門衛だつたもんだから、其時分小父さんも縣廳のお役人で、お祖父さんをお醫者へ懸けてくれたりなんかしたの。それでも治らなくて、お祖父さんが死ぬと僕小父さんの子になつたの。」

「然うですか。」と滿枝は溜息を吐いて目を塞いだ。暫くしてから、「それぢや坊ちやんは、本當の阿父さんも阿母さんも無いんですね？」

「有るけど、知れないの。」

「逢ひたくありませんか。」

「逢ひたい……僕夢に見るの。」

「夢に？何んな風に見えて？」

「阿父さんは、小父さんがお髯の無いやうな人なの。」

「まあ……ぢや阿母さんは？」

「阿母さんは色々に見えるから分らん……」と言つたが、亚一は些つと考へて、「あの、小母さんのやうな人に見えも事もあるの。」

「まあ！夢にね。」と滿枝は頷きながら、「ぢや、夢で無しに、小母さん本當に成つて上げませうか、坊ちやんの阿母さんに。」と亮一の手を握つて、顏を覗き込んだ。

「なつて要らんの。」と亮一は首を掉つて、「僕、小父さんが有るから可い。」

然う言はれて、滿枝はハッと氣が付いたやうに子どもの手を放した。

「然うです、然うです、小父さんは立派な學者で居らつしやるんですからね、何時までも小父さんの傍で可愛がつて頂けば、坊ちやんも今に屹度偉い人に成れますよ。」

「僕ね、體が惡くて學校休んでるけど、家で小父さんに敎はるもんだから、其の讀本だつて一冊最う揚げて了つたの。學校ぢや皆な未だ半分し

か進まないんだつて。」と亮一は得意さうに言つた。

「それぢや學校よりお偉いのね。坊ちやんはそれで、大きくなつたら何にお成りなさるの？　軍人？　學者」

「僕法學士になるの。小父さんも法學士よ。」

「法學士、好いわね。でも小父さんのやうにお酒が好になつちや可けない事よ。」

「僕あ、あんな辛い物大嫌ひ。」

「それから、最う少しお金を取らなけりや……」

「お金なんか……お金を欲しがる奴は高利貸だつて。高利貸は人間ぢや無いつて……」

「小父さんが然う言つて？　ほゝゝゝ、では此の小母さんは何う？　人間には見えない事？　小母さんは高利貸よ。」

亮一は子供心にも惡い事を言つたと思つたらしく、眞赤な顔をして、

「だつて、だつて、だつて……、小母さんは女だもの。」

「ほゝゝ、女だから人間の仲間に入れて下さるの？　高利貸でも？　然う、何うも有難うよ。」と滿枝は笑つた。

「小母さん御免よ、僕惡い事を言つて……御免なさい。」と頭を下げて、

「僕、小母さん大好きなんだから……小父さんが何と言つても、僕は好なんだから。」

「本當？　嬉しいこと！」と行きなり子どもの手を引寄せて、「お禮に何か……上げませう。」

滿枝は些つと考へて、バックの中から紙入を出すと、五十錢銀貨を三つ紙に包んだ。

「今度來る時には、繪本か何か、好いお土產をドッサリ買つて來て上ますから。」と其の紙包みを手に握らせようとした。

「僕要らない。」亮一は慌てゝ手を引込めた。

「あら、何故？」

「譴られるから……此前小母さんにお菓子を貰つた時にも、僕譴られたから。」

「小父さんに見せなきや可いわ、ね、小父さんに内密で……坊ちやんが何か欲しい物があつた時に、内密で買へば可いわ。」

「可けないの。嘘を吐いたり、内密の事をしたりなんかすると、それこそ僕逐出されて了ふ！」

「逐出されたら、小母さんが引取つて上げるわ。だつて小父さんが何と言つても坊ちやんは、小母さんを好だつて今言つて置いて……それなら小母さんの言ふ事も肯いて下すつたつて可いわ。」

「だつて譴られるもの……」と亮一は當惑らしかつた。

「だから、譴られないやうに内密にして置くのよ。坊ちやんは小父さんの言ふ事ばかり肯いて、小母さんの言ふ事は……折角上げようと言ふ物を貰つても下さらないんだもの、人の深切を無にするといふものよ。小母さん本當に慍つてよ。」

「困るなあ……ぢや、僕、貰はう。」と餘儀無さゝうに紙包みを受取つて、

「小母さん、何うも有難うよ。」

惡いとは知りつゝも、子ども心に滿枝の機嫌を損ねまいとする其の憐らしさと、努めて嬉しさうに禮を言ふ其の殊勝らしさに、滿枝は耐らなくなつて抱き寄せた。

「一度つきり、ね、阿母さんと呼んで頂戴！　後生だから。」

「阿母さん。」と小い聲で言つた。

滿枝は頬擦りして何時までも放し難く見えたが、偶と露地の足音に驚いて、手早く其處にあつた紙包みを亮一の懐へ捻込んでやつた。

足音は荒尾が歸つたのであつた。辨當屋の女房が推察通り、酒氣を帶んで顔は赤かつた。亮一が慌てゝ滿枝の膝から飛び退いたのを、木戸口

からチラと見て、彼は不快な顏をしながらツカ〳〵と庭へ入つた。而して二人を尻目に懸けながら緣を上つた。

「亮一、水を持つて來い。えゝ……飲む水ぢや」と其聲は暴かつた。

「お歸り遊ばせ。」

然う言つた滿枝の顏は、最う筋肉一つ動かした迹も見えなかつた。取澄ました淑やかな調子が憎いほどであつた。

「赤樫さんか。」

荒尾はそれきり何とも言はなかつた。亮一が盆に載せて持つて來たコップの水を一息に干して、而してアルコール臭い息をホッと吹いた。

「亮一、飯は濟んだか。」

「未だ。」と亮一は首を掉つた。「お辨當、其處へ來てるの」

「ぢや、彼方らへ持つて行つて食べろ、已は濟まして來た。」

亮一は緣側に置いてあつた辨當箱を、二つ重ねたまゝ茶の間へ抱へて行つた。

「大層御機嫌で居らつしやいますこと、好いお色で。」と滿枝は微笑を含んで言つた。

「晝の中から呆れるかね。」

「いゝえ、御結構で……お羨しいくらゐで御座います。」

「餘り羨ましがらるゝ事でも無いて。見らるゝ通りの辨當飯で、滿足に腹も出來んものぢやで、飯の代りさ。」

「それも御簡便でお宜う御座いますわ。」

「簡便は可いが……主の留守に侵入するのは、些と簡便過ぎるな。」と荒尾は不興氣に見えた。

「恐入りまして御座います、何うぞ御勘辨を。何分遠方の事で、又出直すと申すのも臆劫で御座いますものですから……でも、お目に懸れて何よりで御座いました。」

「僕は逃げも隠れも爲んのぢやから、唯な、僕の留守に侵入する事だけは、子どもの爲に今後も固くお斷りしますぞ！。」

「お子さんのお爲めに？」と滿枝は聞き尤めて

「何故で御座いませう？」

「子どもは無邪氣ぢやから……惡魔にも懷くで。」

「まあ、御挨拶で御座いますこと。」と滿枝はムッとしたのを、強ひて笑顔に紛らせて、「私好んで侵入致したでは御座いませんので。何うかお子さんのお爲めにも、二度と侵入致さないで濟みますやうに極りを附けて頂けば、私も何んなに助かりませう。毎も伺はせました宅のあの若い者も、一度貴方のお刀の錆になり損ねましてから怖がつて最う參らうとは致じませんし、私據處無いものですから遠方をかうじて自身お伺ひ申すやうな次第で。」

「ぢやから、極りを附け得らるゝ時には僕の方からお沙汰をする、其れまではお來では無用ぢや、故々遠方懸けて來て下さつても、所詮無駄ぢやからとお斷りしてある……」

「では、何時お沙汰を下さるので御座いませう？」

「極りを附け得らるゝ時さ。」

「極りを附け得らるゝ時と仰しやるのが何時なので御座います。」

「そりや其時が來て見ん事には、豫め何時とも言へん。明日にも然う出來るか、或は一年後か、十年後か……」

「そんな雲を摑むやうな事を仰しやつてそれで私、然やうで御座いますかとお受けして歸る譯には出來ないでは御座いませんか。子供の使ひでは有ませんし……」

「歸る譯に出來なければ、歸らずに何時までも居るかね、それも可いぢやらう。辨當飯で旨くは無いが、餓じい目は爲せん。」と荒尾は空嘯いた。

「偶にはお辨當も氣が變つて結構で御座いますが、お子さんのお爲めに

御心配で居らつしやいませうから、それは御遠慮致すとしまして……荒尾さん、貴方もお立派な肩書までお持ちの紳士で居らつしやりながら、女風情をお苦しめ遊ばすのが御名譽でも御座いませんでせう。」

「女風情と云ふのは貴方の事かな？ これは意外な！ 一體何ちらが苦しめられとるぢやらう。」

「それは貴方も御迷惑遊ばしてお居でゞせう。けれど私の迷惑もお察し下さいまし。最初名古屋の向阪から話の御座いました時、宅で主人を始め帳簿方の者も何うも、代議士の選擧費ではと二の脚を踏みましたので御座います。然し向阪から再三申して參るものですから、左に右く樣子を見ると云ふ事で私名古屋へ出向いたので御座います。しますると、貴方からも直接御依頼が御座いますし、私も參事官と云ふ歴とした地位の方が連帶ならばと存じて、宅の方へも交渉致さずに、あの際私一存でお取引き申し、た譯で……それが今日かやうな事になりまして、主人に對しても、私全く立場が苦しいので御座います。」

「そりやお氣の毒な事は重々承知して居る。けれど、此方らの事も察して貰ひたい。大館さんはあゝいふ事になるし、僕は又僕で……と言うて今更愚痴を零しても追着く事では無い。始めからかうなる意りで借りたでも、貸したでも無いのぢやから……かうなつたのがお互ひの不運ぢやまあ〳〵時機の來るのを待つて貰うより爲方が無い。何時か拂ふよ、倒しは爲ん。」

荒尾は煩はしさに堪へなくなつた。立つて床の間の罎を取つて、机の下にあつたニッケル盆の小さい脚附きのコップを原稿紙の反古で拭ひながら、

「面白う無い話で、折角の酒が醒めて了うた。貴方も一つ何う？」

「私は不調法で……貴方召上りますなら何うか只今のお話の極りをお附けなすつてから……」

「まあ可い、分つとる。」

「貴方にはお分りでも……。」

「拂はんと言ふのぢや無い、何時か拂ふと言ふぢやから分つとるぢや無いですか……さあそんな難しい顔をして眺めても僕の髯面が鎌足にも清暦にも見ゆる譯でおるまい。美人の目に殺さるゝなら本望ぢやが、睨まらるゝのは可いものぢや無い。」と荒尾はコップに注いで一息に干した。

滿枝は暫く荒尾の顔を見詰めてゐたが、

「ですが荒尾さん。」

「又か？」

「いゝえ、私ね、全く貴方には……」

「呆れたかね？」

「感心して了ひました！」

「これは恐縮ぢや。」と荒尾は苦笑ひしながら、片手に鰻を取つた。

「些とお酌でも致しませうか。」

「忝ないが、手數料を取らるゝと怖いで。」と二杯目を注いで一口附けた。

「仰しやいよ！手數料をお取られなさる貴方ですか。」

「はゝゝ、有繋の赤樫さんも、荒尾の貧乏には策の施しようが無い。」

「全くで御座いますよ。お立派な御器量をお持遊ばしながら、好んでかういふ生活をなすつて居らつしやるのですから。」

「馬鹿を言うては可かん、誰が好んで貧乏するもので。かうして辨當飯を食うて暮すのも、誠餘儀ない……それは、赤樫さんこそ最も能う御承知の筈ぢや。荒尾の物好きでも洒落でも無い。」

滿枝は故と空惚げて、

「ですが、かういふ御生活も風流で。」

「餘り風流過ぐるて。ぢやが、世の中は左にも右くにもありぬべし、宮も藁屋も果し無ければ……不義の富を積んで、金庫の前に積惡の老軀を

横へて居るよりも寢覺めは可い。何うかね、間の話に聞くと、御主人の權三郎氏、近頃大分病氣がお惡いさうぢやが？」

「何うせ積惡の老人ですから。」と冷かな目をジロリと向けて、

「貴方のお憎しみばかりでも、今度は駄目で御座いませうよ。」

「それはお氣毒ぢやね。僕の憎しみ如きで參るやうな權三郎氏でもあるまいが……彌張り年には敵はん、死は平等ぢや。何十年間惡魔となつて蓄積した幾萬の富の力でも、死んで行く命は購ふ譯にも出來んかな。」

「死ぬ者貧乏とやらで、致方も御座いません。」

「とだけで、貴方は現在自分の當面に示されつゝある御主人の運命を見つゝあつても、何等の感じも爲んかね？」

「看病の方に追はれてゐますので、なか〳〵そんな感じたりする暇は御座いませんわ。」

荒尾は苦り切つて、コップを片手に頬髯を扱いた。

「赤樫さん、貴方は間の近況を御存じか。」

「は、何ですか、是までの御商賣をお舍し遊ばすとか。」

「それに就いて、貴方はどう考へらるゝな？」

「私？ 私が何う考へませう、間さんのお考へで間さんの爲さる事で御座いますもの。」

「然うぢやか知ら？ 權三郎氏が死後の遺產を餌料にして、妙な誘惑めいた手紙が間の所へ來て居つた……」

有繋の滿枝も其の薄く粧つた頰をパッと染めて、荒尾の視線を眩しさうに避けた。

「僕は現に其の手紙を見て皆知つて居る。然し間の今度の決心は、貴方の思うとるやうなそんな薄弱なものでは決して無い。彼は着々其實行を擧げつゝあるのぢや。立入つた話ぢやが、貴方は是まで間を慕うて居られたさうな。貴方ほどの婦人がぢや、假りにも男子を慕うと云ふからに

は、年の行かぬ小娘や、浮氣稼業の女どもとは違はんければならん。何等か其處に貴方の心を引付くる精神上の或るものが、間に存してあるからぢやらう。彼を知る者は十人が十人、因業で片意地で……同じ高利貸仲間からさへ偏人として除者に扱はれた。誰一人間の間たる眞の彼が人爲りを認むる者も無かつた中に、唯貴方のみが……すりや貴方は彼の知己ぢや。精神上の間、眞の間なるものを解して居らるゝ知己ぢや。其の知己として貴方の解する間は、物質上の我執を棄て、迷夢を覺して、精神上の眞の生活に新しく入つた、なり。貴方が知り且つ解する唯一人は覺めたのぢや。からして貴方も一處に最う覺めても可い頃であらう、と僕には思はるゝが、何うかな。」

「然やうで御座いますね。然う仰しやつて下さる御深切は全く有難いと存じます。存じますけれど、私精神上の間さんを解するとか解しないとか、貴方の買冠つて下さるやうな、そんな發明な人間では御座いませんのですから……御存じならお隱しする必要ありませんが、私、間さんをお慕ひ申すのは並の女の色戀と少しも變つてゐませんので……唯あの方に丸髷でも結つて見せて、優しいお辭の一つも懸けて頂けば本望なので御座いますよ。いえ全く！かうなると女は意氣地は御座いませんわ。」と顏も赤めずに言つて、滿枝は白々しく笑つた。

それは、上品振つた勿體らしい毎もの滿枝と全で違つた、無論捨鉢の言草と察した荒尾は、故と眞顏を作つて、然も感ずるものゝあるやうに頷いて見せた。

「成程、戀に賢愚は無い、戀は盲目とか云ふ諺も聞いて居るが、成程、貴方ほどの才女でも彌張りな、然やうか。僕は最些つと意味あるらか並みの色戀と違うて居るかと思うたが……然うであるなりや、そりや貴方にも似合はん迂濶ぢやつたね。間には一旦相許した戀人があるものな。」

「それが餘所の花になりましたので御座いませう。私存じてゐます。一度お目にも懸りました。」

「ほう、そりや意外ぢや。全く？」と半信半疑の目を側めた。

「全くも全くで御座いませんも、私、現在間さんがお家へ引入れて、逢引とやらの最中へ參り合せたので御座いますもの。あの方も一國者とか偏屈者とか言はれて御自分でも女嫌ひのやうに濟まして居らしつて、昔は左に右く、今日は最う歴として主ある然ういふ者と……私、實に驚きましたので御座いますよ。あれだけはお愼みなさいますやうに、貴方も御朋友効に御忠告遊ばせな。」

「然う〳〵、間の家で貴方と其の婦人と落合うた、成程そんな話を間から聞いたやうぢや。」と荒尾は始めて思出した。而して滿枝の嫉妬がましい口氣を心に可笑しく思ひながら、「いや、それなら忠告には及ばんですちや。近い中に其の主なる者の手を放れて、親元へ歸る筈になつて居るちやで……こりや未だ本人にも話さんが、僕も實は、元の持主に改めて引取らさうかと思うて居るくらゐぢやで」

「元の持主と仰しやるのは間さんで？」と滿枝の顏色は變つた。「では究り、是れまでの不義を成功お爲せ遊ばすので御座いますね、貴方の御斡旋で。」

「何故な？」

「親元へ引取ると云ふ名義で、今までの夫から體好く離縁させて置いて、而して間さんと公然結婚をお爲せなさるんでせう。本に御朋友と云ふものは、何處まで頼もしいもので御座いますかねえ。」

「馬鹿な、貴方はそれでは何にも知らんのぢやね、先方は氣違ひぢや。氣が違うたから離縁も取るので、結婚など出來る體ぢや無い。」

それは滿枝には信じられなかつた。

「氣違ひとは奇抜で御座いますこと！」と嘲笑つて、「尤も世間に無い例で

も御座いませんわね。貰へない暇を貰つたり、無理に離婚を取つたりする時に能くある狂言で……得てして、不義でも爲ようと云ふ婦人は……」

「默んなさい！」と荒尾も終に聲を激まさずにはゐられなかつた。「不義ぢやの、狂言ぢやのと聞苦しい！　過ちを悔いて發狂までした可憐な女性の胸中が、君如き妖婦に解されんも無理は無いとしても、眞人間に立復つた僕の親友を、恥かしむるものぢや。傷くるものぢや。大抵にせんと僕も聞棄てに成らんでくる！」と言つて、例の強い酒を續けてコッヂに一杯干した。

「お氣に障りましたら御免下さいまし。私が間さんを恥かしめるなら、私も間さんに恥かしい思ひを爲せられてゐるので御座います。あの方、女と名の附く者は一切嫌ひだなぞと、立派な口を私にお利きなさりながら、今更らそんな不義の對手と……私、間さんに賣られたので御座いますもの、悔しう御座いますわ！」と滿枝は持つてゐたハンケチを噛んだ。

荒尾は呆れて其れを眺めてゐたが、

「赤樫さん、一體君は何ういふ體か。」と苦々しげに言つた。「年こそ親ほど違ふさうな、體もそりや利かんさうな、が、夫は夫ぢや、君は赤樫權三郎なる者の妻ぢや無いか、假にも夫ある身で、間に思ひを懸くる、それが叶はんからと言うて、悔しい？　賣られた？　少しは自分の良心に省みたが可いぢやらう。他人の不義呼はりが出來べきぢやあるまい。」

「憚り樣で御座います。成程私は權三郎の妻で、仰せが無くとも能く承知致してゐます。ですから、權三郎の生前に何うの、かうのと間さんに申上げた事は御座いません。唯權三郎も何時何うなるか分らない病人で、萬一の時女一人では後が心細いから、先き〳〵の爲め間さんにお願ひ申しても見ました。それだから他人の不義呼はりが出來ない、貴樣も不義だと仰しやれば不義で宜しう御座いますけれど、私、未だ、夫のある身

で姦通までは致しません。」

「姦通せんのが誇りか。」

「姦通したのが同情すべきでせうか。」

「誰が同情した？」

「貴方が！ 同情なさればこそ、二人の仲を斡旋なさらうと云ふので御座いませう。」

「歸れ！」荒尾は勃然として、「己を以て人を度る！ 此の荒尾まで不義の荷擔人とするか、赦すべからざる奴ぢや。」

「そらね、二人の不義は彌張りお認めなすつてぢや有りませんか、貴方も。」

「えゝ、歸れと言ふに！」

「はあ。歸れと仰しやれば歸りますが……」と瀟枝は飽くまで落付いて、

「それでは何うか肝心のお話の方を……つい私益にも立たない無駄話に紛れて了ひまして、ほゝゝ、何と云ふ商賣の疎かな事で御座いませう。」

「歸れと云ふに歸らんか！」と行きなり持つてゐたコップを縁先きへ叩き付けた。

「ですから、歸れますやうに極りをお付け下すつて……で無ければ私、何うしても今日は宅へ歸りようが無いので御座います。」

「可、歸らんけりや歸して見する。待て！」

荒尾はスックと立つた。酒氣のあつた上に、曩から幾杯と無く重ねた強い酒の利き目は、此時足の跟めくまで醉に出た彼はヨロ〳〵となつて、置床の框で踏みこたへると、其所に立て掛けてあつた鬱金の袋入りの一口を取つた。丁度袋の口紐も解けてゐた。植込を漏れて軒近く射し入る午後の日影に、白刃の光りがキラリと輝いた。

有繋の滿枝もギョッと色を變へて、思はず膝を浮かせた。其の目は刃の光りよりも鋭く光つた。

「危いよう！」と魂消るやうな叫聲を擧げて、茶の間から亮一が駈け出た子どもながらも、一生懸命に荒尾の袂に縋つた。

「子どもの出る處ぢや無い、退込んで居れ！　えゝ、退け、退かんか！」

振拂はれて突伏した亮一は、更に滿枝の方へ駈け寄つた。兩手を肩に懸けて、小い體で彼女を掩ふやうにして、

「可けないよう！　小母さんを斬つちや……」とホロ〳〵泣きながら、怨めしさうに荒尾の方を振ぢ向いた。

滿枝はヒシと亮一の體を抱き締めた。目には涙が浮んだ。

「赦して……小母さんを赦して……」

「亮一！　貴樣……」

然う言つたきり、荒尾は頰髯を顫はせて子どもの顏を睨め据ゑたが、急に寂しい不快な氣色をして、白刃をガラリと投げ出した。而して醉の發した體をフラフラと崩れるやうに床前へ落した。

其三

「荒尾君、何うしたのだ？」

かう聲を懸けて、木戸口を入つて來たのは間貫一であつた。彼は今少し前に來合せたのであるが、中の騷ぎに遲らはれて、垣の外から暫く樣子を窺つてゐたのであつた。

荒尾はグッタリ床柱に凭れて、熱い酒氣を吹いた。

「おや、間さん。」と滿枝が先づ聲を懸けた。

貫一は荒尾の方にのみ氣を取られて、返事もせずにツカ〳〵と縁を上つた。而して投出された白刃を手早く拾つた。

「え、何うしたのだ？　荒尾君。」

「間か。」

「何うしたのさ？　此の始末は。」と刀を袋に收めた。

「間、其女を早う逐出してくれ。其小僧は君に預ける！面も見たう無い。」
事の譯は分らぬが、友の苛立ち切つた樣子を見て、貫一は頷いて滿枝に言つた。
「赤樫さん、今日は左に右くお引取り下さい。萬事は僕が引受けます、今夜にもお宅へ伺つて、然るべく處置を付けますから。」
滿枝も有繋に好い心持はしなかつた所であるから、素直に承知して、
「大層お醉ひ遊ばして居らつしやるやうですから、今日はお話も付きさうもせんでせうから……貴方も然う仰しやる事ですし、では私是でお暇致しませう。今晩それでは、手前どもへ貴方お越し下さるので御座いますね。」
と脫かり無く念を押した。
「伺ひます。」
「屹度？お間違ひ無いでせうね。」
「間違ひありません。」

「お待ち申してゐます。では荒尾樣、失禮致しました。坊ちやん、體をお大事にね。」
滿枝は靜に衣紋を繕つて立つた。其の鮮かな姿が凉しい色のパラソルに掩はれて木戸の外の植込みの彼方に隱れた時、
「何うも思切つた事をするね、君も……驚いたよ。」と貫一は言つた。
「餘り無禮ぢやから……それでも犬猫とは違うて、豈か斬る譯にも行かんが、一つ二つ背打ちを吃はしてくれうと思うて。」と荒尾は苦笑ひをしたが、「それよりも怪しからんのは此奴ぢや。」と亮一を顎で指した。
彼は襖の傍に蹲つたまゝ、曇からの驚きが未だ鎭まらぬらしく、眞蒼な顏をして顫へた。
「何と思うてあの女を庇ふんか……」
「君が刀なぞ拔くものだから、喫驚したんだ。子どもだもの、無理も無い。」

「いや、其前にも僕の留守に甘たれて居るのを見た。あの女の如何なる者かは不斷言聞かせてあるぢやに……庇立てしをるのみか、僕に對して反抗の色を見せをつた。曩僕を見た此奴の目、子どもながらも不快極まる目附きをしをつた！」

「君にも似合はない、子どもを捉まへてそんな……眞氣になつても爲方が無い。」

「大人氣無いと君は思ふぢやらう。が、僕の身にしては其處に耐らん不快があるのぢや。かうして世に反き人に遠かつて、寂しい孤獨の生活をしてをる僕は、憂きに就け佗しいに就け、此童も同じやうな哀な孤兒と思うては撫つてくれた。此童も僕より外に賴る者は無いのぢや、小父さん〳〵と懷かれて見ると、一層不憫も加はるし、僕も友人一人無い寂しい境界に何よりのそれが慰めぢやつた。處が、子どもの心は何時の間にか裏切りつゝあつたのぢや。此の小さな心さへ賴まれぬと思ふと、僕は不快よりも寧ろ情無く感ずる！」と荒尾は沁々言つた。

「然し、時鳥の子が鶯の巣で育つても、鶯には成らんからね、彌張り親の時鳥の方へ行く。」

貫一は意味ありげに言つて、机の上のペンを取ると、其所の原稿紙に何やら書いて荒尾に見せた。

荒尾は其れを讀み下すと、

「むゝ、然うか！」

「意外だらう。」

彼は暫く言も出なかつた。醉も一時に醒め果てたやうであつた。

「意外ぢや！」と程經つてから押出すやうに言つて、「ぢや、事に依ると、二人の間には、僕に內密で既に意志の疏通が出來て居るかも知れん。亮一、貴樣は赤樫の女から何か聞いた事でもあるか。」

亮一は怪訝さうに荒尾の顏を見た。

「亮一君、君は阿母さんを知つてるかね。」と貫一も聞いた。

亮一は首を掉つて、

「僕知らんの、阿母さんも阿父さんも。」

「然し、何時かは分らずには居らん、明様に言うて聞せた方が可いぢやらう。亮一、貴様を生んだ阿母さんはな、あの赤樫の女ぢやぞ、赤樫満枝が亮一の母親なのぢや、可いか。然う分つて見れば、己れも親子の間を遮らうとは言はん、母親の所へ行きたければ其のやうに又圖らうてやる。貴様も最う十歳ぢや、外の事とは違うで、能う考へて見い。」

亮一は目をクル〳〵させたまゝ辭は無かつた。子ども心にも餘りの意外に呆れたらしい。小い胸には何等の判斷も出來かねて、其の惱ましげな表情は見るに忍びぬまで慘しいものであつた。

「それで、君は又、何うしてあの女と亮一との關係を知つたか？」と荒尾は聞いた。

「そりや満枝の本姓が宍原と云ふ事は、僕も豫て當人から聞いてゐたし、亮一君のお祖父さんの名が亮吾と云ふ事も、君から聞いて知つてゐた。處が此頃偶と、舊幕臣の士族で宍原亮吾と云ふ人があつて、其人の娘の名が彌張り満枝と云つたといふ事を聞込んだものだから……いやそれを聞いた對手に就いては、實は君を驚かせる意外の事があるのだが、それはまあ後で話さう。處で、亮一君は何う、するね？」

「何うとも、彼の意志に任かせる積りぢや。」

「意志に任かせると言つて、子どもでは分別が付くまい、左に右く僕の處へ預からうか。」

「亮一、何うする？　此の小父さんの所へ行くか。」

亮一は首を掉つた。

「彌張り母親の所へ行きたいか。」

亮一は又首を掉つて、

「僕、何所へも行きたくない。」

「ぢや、何うするのぢや？」

「此所に居たい、僕何時までも小父さんの傍に居たい。」

「然うは行かん。赤樫の女が生んだ子ぢやと知つては、仍更己れの傍には置けん。時鳥の子は時鳥へ行くのぢや。己れは結句獨りを欲するのぢや！」荒尾は憮然として言つた。

亮一は兩手で顏を掩つて泣き出した。

「亮一君、何も泣く事は無い。何ちにしても君の爲めに惡いやうには爲んのだから……まあ外へでも出て氣を紛らして來給へ。小父さん達は色々話もあるから……ね、少しの間遊んで來給へ。」と貫一は辭優しく促した。

亮一は顏を抑へながら、シホ〳〵と立つて行つた。

「可哀さうに、子ども心にも君に對する義理を思つて、親の所へ行きたいとは言はん。」

「僕も泣かされた！」と荒尾は目を數瞬いて、「不憫な奴ぢやよ。行末の爲めにも赤樫のやうな奴に渡したく無い。君、何うか引取つて、僕に成り代つて彼童を眞人間に育てゝやつてくれんか。」

「可いとも。そりや何とか賺して、今日からでも僕が連れて行くがね……」と貫一は一膝進めて、「寧そ何うだね、荒尾君、君も此際一轉機をしたら？」

「一轉機とは？」

「君一身の改革さ。實は今日僕も君の其の意向を聞きたいと思つて來たのだが、君も可惜ら有爲の材を抱いて、何時までかうして世に埋もれてゐるのも本意ではあるまい……いや、君はそりや恩人の爲め、義の爲めにかうなつたので、心密に滿足してゐるかも知れない。けれど、人物の經濟といふ點から云つて、君ほどの人才を空しく陋巷にかうして置くの

は國家の爲め、社會の爲めに僕は惜しむのだ。それには第一に先づ君の現在累はされてゐる、赤樫なぞのあゝいふ債務を一掃したら可からうと思ふ。僕も君のお蔭で眞人間に立復らせて貰らつたから、其のお禮……と云ふよりも、僕自身が是まで社會に對して犯して來た罪の償ひとしてだね、究り是から眞人間の道を踏んで行く其の第一歩として、切めて君の債務の整理でも爲せて貰ひたいと思ふのだが……」

荒尾は机に片臂凭せて、例の下髯を扱きながらジッと聞いてゐた。

「有難う、君の厚意は僕も感謝するけれど……まあ些と考へさせてくれ。」

「何う考へるのだね。或ひは君の氣性として、僕に然ういふ事を爲せるのは潔くない？」

「いや、外の者に爲れるのとは違ふ、親友の君に爲て貰ふのに、潔くないの有るのと、そんな廉潔振つた痩我慢は言はんぢやから、君を勞はすに足るだけの價値ある場合に僕が若し臨んだ時には、改めて僕から願ふ

も知れんが、今はまあ一簞の食一瓢の飲で、似而非顏回でも氣取つて居る方が僕自身に相應ぢやらう。」と苦笑ひをした。

「分つた。それだけ聞いて置けば僕も滿足だ。」と貫一は意有りげに頷いたが、「時に、法學士の蒲田君ね、僕は高等中學だけだが、君は大學卒業するまで一處だつた蒲田鐵彌……あの男に逢つたよ。」

「ほう、何時？」と荒尾は意外の目を見張つた。

「昨日。」

「何所で！」

「遊佐良橋と云つて、僕の債務者の家で前にも一度蒲田君と其家で出會つて、僕も大いに苦しめられた事があるが、昨日債權拋棄の通知旁た證書を返しに行くと偶然又蒲田君と落合つて。」

「ぢや、シンガポールの領事館の方は何うしたぢやらう。」と氣遣はしげに見えた。

「先月限り引擧げて、今度は關東都督の外務部長に榮轉するのださうだ。切りに君の近況を知りたがつて、色々僕に訊ねて居たつけ。僕も君のお蔭で今度改心した事を話すと、大いに喜んではくれたが、何だか未だ半信半疑のやうで打解けて話もしてくれんから、僕も好い加減に切上げて歸つたが……蒲田君の口振りでは、何でも國際上の或る問題で、是非君に立つて貰はねば成らんとか言つてゐた。君の住所なぞ手帳に書き留めてゐたから、近い中に訊ねて來るだらう。」

「然うか、用件は左に右く、是非一度逢ひたいものぢや。去年僕が丁度名古屋の方を免官になつた、然かも其の當日、蒲田はシンガポールへ赴任すると言うて暇乞ひに寄つてくれた。其際も君の噂をして惜んで居つたが、今度歸つたのを幸ひ、一度三人で寄つて、高等學校時代の昔話しでも爲ようでは無いか。」

「それは可からう。昔話も昔話だが、次手にお互ひの將來に就いても話し合はう。殊に蒲田君は、君に大いに期待する處があるらしいから。」

それは全然荒尾には心當りが無かつた。殊に國際上の問題なぞに、今の自分が是非にと望まれて立たせられるやうな、名も力も自分で認められなかつた。然し貫一は、蒲田から僅に洩れ聞いたのみで深くも荒尾の將來を期待するらしかつた。荒尾の所謂自分を勞はすに足るだけの價値ある場合、それは現在の境遇から一躍する爲めに、喜んで自分に責務を處置させる時期が、遠からぬものと固く心に信じた。

「君の所謂、僕を勞はすに足る價値ある場合が……行らん煩累は僕に任せて置いて、君の飛躍すべき時期が、蒲田君に由つて齎らされるかも知れん。」

「さあ……何うかね」と荒尾は唯首を捻つた。暫くしてから組んでゐた腕を解いて、「處で、今度は君の問題ぢやが、間、君は今日かうして既に悔悟をした、悔悟をした以上は、此六年間の君の墮落の罪は赦されたも

のと自身には認めるぢやらうな、一旦罪を悔い改めたからには、最う眞人間の間貫一を以て公々然と世間に對するぢやらう。では若しぢや、以前の間貫一、高利貸の間を以て、猶且つ今日の復活した間貫一を取扱ふ者があつたなら、其時は君は何う爲る？」

妙な難問に、貫一は迷つた。こんな附かぬ問ひを發した、荒尾の其の意のある處を怪しまずにはゐられなかつた。マジ〳〵と顏を見詰めて答も無かつた。

「な、其時は何う爲るか。」

「何うも爲方が無い。自分にそれだけの罪があるのだから、默つて忍ぶよりは……」

「ぢやが、懺悔をすれば罪は無い。悔い改めた者は全能の神でさへ赦すとあるに、況して全能ならぬ人間がぢや。それ自身既に罪を犯すべき可能性の人間が、今日折角悔悟した君に向つて、悔悟以前の舊罪を執念く

尤めると云ふのは、縱んば默つて忍ぶより爲方が無いにもせい、君は慘酷と思はんか。」

「そりや思ふ。」

「思ふぢやらう。尤めらるゝ此方は、それだけ自分に覺えがあるのぢやから、口惜しいけれども默つて居る、な。默つて忍んで居らるゝ中は可いけれど、是が意志の弱い者であつたりすると結局自暴になる。折角悔悟した効が無うて、又再び墮落に後復りをする……」

「いや、分つた。」と貫一は不審の眉を解いて、「すると君は何かね、僕が今日かうして悔悟は爲たけれど、今後又何う氣が變るか知れない、と君は案じるのかね。然しそれほど僕も意志が弱くは無いからそれだけは安心してくれ給へ。是まで僕も隨分社會の激しい風波に揉まれて、人情世態の如何なるものかも略ぼ了解した意りだから、今後は最う多くを世人に望みはせんよ。六年前の貫一は餘りに正直であつたから、あんな恐な

自暴も發したし、墮落も爲たが、今日の貫一は最少し横着になつたよ。」と言ひて、荒尾の懸念を打消すやうに高く笑つた。

「然う、人間は横着に限るよ。餘り正直ぢやと、つい人を怒つたり怨んだりする。正直は美德ぢやあるが、それでは器が小い。其處へ行くと、其罪を惡んで其人を惡ます、と訓へた昔の奴は横着者ぢやつた。横着者の中でも殊に第一人のクリストは言うて居る。爾等若し人の罪を赦さば、爾等の父も亦爾等を赦さん、されど人の罪を赦さずば、爾等の父も亦爾等の罪を赦し給はじ……な、間、君も自ら赦さるゝと共にぢや、最う可い加減に彼も赦してやつたら何うぢや。」

是であつた、荒尾が附かぬ問ひを發したのも。而して懺悔の前に罪は無いぞ、舊罪を尤めるのは殘酷だと言つたのも、敢て貫一の今後を氣遣つたのでは無く、實に是を言出す爲めに長い其の伏線であつた。それと知つた貫一の顏は、微かに神經的に顫へて、急に俛れて了つた。

「悔悟前の間を以て、悔悟後の間を取扱かふ者があつたら……そりや默つて忍ぶより爲方が無いとしても、彌張り取扱ふ者を殘酷と思ふのは君も同じぢや。自ら過ちを覺つて、是までの罪を眞心から悔悟した以上は、彼も最う赦してやらんけりや尤める方が殘酷ぢやぞ。君は男ぢやから、能く默つて忍び得るだけの强い意志もあるのぢやが、彼は女ぢや。弱き者よ、汝の名は女なり……間、君は未だ知るまいが宮さんは發狂したさうぢやぞ！」

「發狂!!」貫一は彈かれたやうに顏を擧げた。其の顏色は變つた。宮の發狂といふ事は、彼も今始めて聞くのであつた。

「宮さんの實父、鳴澤の老人な。實は老人が今日故々其事で僕を訪ねて來たのぢや、小石川の腦病院へ入院しとるとか……老人の話では、全く君の爲めに發狂したのぢやさうな。發狂しつゝも猶、君に濟まんと言うては現に二度までも自殺を圖つたとか、悲慘の極ぢや。君は自ら悔悟し

て自ら救はれたが、彼は悔悟しても救はれんかつた、赦されんかつた。其結果が終に精神錯亂！」荒尾は悵然として目を塞いだ。

貫一も差俯いて涙を呑んだ。

「間、此前僕が始めて君を訪ねた時に、彼の悔悟は彼の悔悟で、君は自分の知る處で無いと言うた。彼の悔悟の爲めに君の失ふたものが、再び得らるゝ譯で無いと言ふから、僕も强ひて赦してやれとは勸めんかつた。あの時には未だそりや第二の問題ぢやつた、人を赦すよりも、先づ君自らが赦されんけりや成らんかつたものな。ぢやが、今日は爰[illegible]間に立復つた君ぢや、其の眞人間の間貫一の心を以て、悔悟した彼[illegible]て、而して自殺まで爲ようとする彼に對してぢや、一片相憐の[illegible]ても然かるべきぢやらうと思ふ。君も赦されたのぢや、彼も赦してやれな。」

「赦して……それで、彼が何うなる？」

と貫一は蒼褪めた唇から、漸と呻くやうに言つた。

「何うなるものか、彼が救はるゝのぢや。」

「救はるゝとは？」

「心も體も君に由つて助かるのぢや。發狂したとは云ふものゝ、今は未だ君と云ふものを意識しつゝあるのぢやさうなが、それも何時まで續くか、第一體の方が參つて了ふぢやらう。此のまゝ措けば死ぬるより外は無い、屹度死ぬる。間、彼は死ぬるぞ！君に若し六年前の彼が、今仍ほ少しでも胸に殘つてゐたら、殺すな！」

「それは然し、僕の責任では無い……」

「責任の有無を論ずる場合ぢや無いでは無いか。君の心一つで、助かるか、見殺しにするか……人一人の死活の問題ぢや。」

「縱んば見殺しにする心で無くても……助けないのでは無い、僕には助けられないのだから止むを得ん。」

「何故な！」

「彼は富山宮だ。」

「なら、富山から引取つたら？」

「……」

「引取つて、鳴澤へ歸つたとしたら何うぢや？」

「然し……昔の最う宮では無い……」と貫一は情無さゝうに半ば自分へ言つた。

「が、君の憎む處の宮でも無い。發狂した彼は是までの最う彼では無い、別人ぢや、別人も同樣ぢや。刑は一身に留まると言ふに、赦してやれ。」

貫一も幾らか心が動いたらしく、

「赦して……赦すとして……然し僕に、何うしてくれと云ふので？」と改めて聞いた。

「何よりも一度會うてやるのぢやな。會うてからに、面り赦すと言うて安心させてやるのぢや。君故に發狂し、君故に自殺まで爲ようとする、今日彼が思うて居る事も言うて居る事も、徹頭徹尾君の事のみぢやさうな。現在の彼が全心を支配するものは唯君ぢや、君は彼が生命の全部なのぢや。であるから、其の全部である處の君が親しく慰めてやつたなら、或ひは病氣が癒えんとも限らん。元々精神の感動から發つた病ぢやで、其方の慰安さへ與へたら鎭靜するに相違無い。君が若し、彼を憐んで、再び昔の宮さんに復らさうと云ふ同情心があつたら、此際一日も早くぢや、彼を赦して、而して君の手許へ引取つてやる……」

「まあ君、荒尾君、待つてくれ給へ。會はうか會ふまいか、それも未だ決らんのに……」

「然し、赦してやるか。」

「赦さう！」と終に貫一は言切つた。「赦してやる、君も折角それまでに言つてくれるのだから……」

「ぢや、赦した以上、會うてやるくらゐ何でも無いでは無いか。實はな、鳴澤の老人が今日訪ねて來ての頼みには、何うか一目なりとも會はせてやつてくれい、間が飽くまで赦さんけりや爲方が無い、唯顏を見せてやつてくれるだけでも可い、とそりや切なる頼みぢやつた。白い頭を下げて、絶らぬばかり僕に口説くのぢや。僕も氣の毒でもあり、且つ又同情も十分爲て居るのぢやから、斷るに斷りかねた、素氣無う歸すに忍びんかつた。けれど、如何に斷るに忍びんからと云うて假りにも彼は人の妻ぢや、氣は違うても妻たる名義は違はん。富山の妻、富山宮として入院して居る所へ、君を連れて行く。不義の手引きをするのも同じぢやで、僕はそれは出來んと斷つた。老人も血迷うて居る際ぢやから、事理の辨別が無い。と云うて、他人の僕が明樣に言ふべき事では無いから、歸つて能う考へなさいと言うた僕の謎、漸と歸り際に解けたと見えて、では是から歸つて直ぐにも富山から離縁を取る。富山の方を離縁して、鳴澤の娘に復つたら、間を連れて來てくれるかと言ふから、僕は必ず連れて行くと引受けて歸へしたのぢや。間も最う是までの間では無い、眞人間に立復つた……人一倍血もあり涙もある昔の間貫一に立復つたのぢやから、宮さんの其悲痛なる悔悟を容れん筈は無い。發狂した、自殺まで爲ようとしたと聞いたら、無論赦す……赦して必ず會はせる、會はんと言うても引受けて僕が會はせずには措かんとまで、固く老人に誓うたのぢや。君も既に赦した以上、僕の面目を立てゝ、抂げて會うてやれ……。此際最早や進んで會うてもやるのが人情では無いか、赦したのに、何故會ふのを躊躇する？　君の躊躇するのが、何うも僕には解せんよ。或ひは赦したと云ふのは僞りで、其實未だ君は……」

貫一は忙しく首を掉つた。

「然うで無い？　無いから……」と言懸けて、荒尾は偶と貫一のションボリ差俯いた體を見遣つて、「ふむ、それとも何か、君は會ふのが愁いか。

昔と變つた彼に逢ひ見るに忍びんのか。」

「それもあるが、然し……」

「逢ひ見るに忍びんと云うて、君が何時までも避けて居つたら、彼の病は重るばかりぢやぞ。いや、重る前に、彼は恐らく死ぬるぢやらう。」

「然し……それ程までに君も言つてくれるものを、僕も此上强情を通してはあまんから……」

「會うてやるか？」

「會つて見よう！」

「能う言うた！それで宮さんの命は屹度助かるぞ。」

「……」

「あゝ、六年前の宮さん、鳴澤の宮さん、僕も能う世話になつた。花は散つても又咲く、最う一度昔の宮さんに復らする事は、出來んものか、なあ、間。」

「……」

二人は相顧みて泣いた。

第七章

「貫一さん、赦して！貫一さん……」と宮は寢臺の上に身悶えした。

「あれ、そんなに體を揉んぢや、繃帶も何も何うかなつて了ふぢや無いか、あれ……」と母親のお高はハラ〳〵した。

「貫一さん……貫一さん……」と聲は細つた。

「こし、宮、貫一は直き來るからの、靜かにして……」と父親の隆三は娘の顏を覗込んで「何だか顏色が變つて行くやうだが、はて……目を瞑りますが、心配はありませんかな？」と心許なさゝうに醫者に聞いた。

「藥が利いて來たのです。少し眠つて鎭靜した方が可いですから……。明る過ぎるやうだな、其物で光線を遮ると可い。」と看護婦に指圖した。

看護婦は壁際に疊んであつた屏風を、寢臺の枕元に立て廻した。

「改めて申すまでも無いが、此の質の患者は絶えず自殺觀念に襲はれて

ゐるのですから、何うも油斷が成りません。傍で餘程御注意なさらんと危險ですよ。」と醫者は老人夫婦に注意した。血に染んだ硝子の破片を看護婦に渡しながら、「何うしてこんな物を持つてゐられたのか。平素患者の身周を能く注意して調べんと可かんな。乳を突いたぐらゐで未だ可かつたが、患者に由つては嚥み下す事があるから、かういふ硝子だの針だのと云ふ物は餘程注意せんと危險だ。」

「はい。何うしてそんな硝子の破片なぞお持ちなさいましたか……何うも不注意で御座いました。是から一層氣を付けますで御座います。」と看護婦は面目無さゝうに言つた。

「貴方々も十分御注意なすつて。傷は何、大した事はありませんから御安心なさい。」と老人夫婦に言遺いて、醫者は出て行つた。

看護婦も血に汚れた敷布や、繃帶の餘りを一纏めにして持ち去つた。

後に老人夫婦は、ホッとしたやうに顏を見合せて辭も無かつた。

melancholyer

小石川腦病院の特等室、ベッドに横はつたのは心狂へる宮であつた。

一月十七日！　初春の月の夢のやうな熱海の海岸に貫一を棄てゝ、彼が富山へ嫁入つてから今年丁度六年目である。輿入をした其年に妊娠して、彼自ら淺ましくも情無くも思つた產兒は幸ひに日立ちが惡くて育たなかつた。然し產後の血の氣が何時までも癒ゑなくて、其時最うヒステリーの症候があつた。始めの中は彼も唯心樂しまないと云ふだけであつたが次第に哀愁となり、悔恨となつた。沈思悒鬱、それが嵩じて不眠、不食、知覺にも折々異常があつた、言ふ事も錯亂した。譯も無く泣くかと思ふと、急に又笑出すやうな事もあつた。而して爲る事行ふ事が變換常無い發作的となつては、單に神經病やヒステリーとのみ見られなかつた、最う疑も無い急性メランコリアとなつた、正月以來此精神病院へ收容される事になつたのであつた。

それは去年の冬の中頃、宮の精神錯亂を始めて認めたのは母親のお高で、其時は直き發作も鎭つた。お高は餘り口喧ましく責めた爲めに、心狹い娘が一時取逆上たぐらゐに思つた。處が宮の發作は引續いて毎日のやうに起つた。發作中の彼女は、唯繼が夫である事も、自分が唯繼の妻である事も、全でそんな見境は無かつた。唯貫一の事ばかり口走つた。

氣狂ひの言ふ事とは云ひながら、唯繼も決してそれを無意味には聞かなかつた。傍に附添つてゐるお高の心配と云ふものは無かつた。病院へ移つてからも、富山からの見舞人を成るべく宮の傍に置かないやうにした。而して赤阪とかの增す花に見更へて、妻の病氣をついぞ訪ねようともせぬ唯繼の薄情を怒りながらも、來てくれぬ方が却て氣安くも思つた。

病院からは熟練した看護婦も附けた。然しお高は、骨肉の自分で無ければ屆く處も屆かないやうに思つて、附き切りに病院で寢泊りした。父親の隆三も、二日と病院を見舞はずには居られなかつた。娘の容體も氣に懸れば、老妻の心勞も察せられて、殆ど毎日のやうに訪ねて來た。來

れば半日近くも病室にウロ〳〵してゐた。

お高は立つて、ソッと屏風の中を覗いて來て、

「好い鹽梅に、スヤ〳〵睡つてゐますよ。」と小聲で隆三に言つた。

「然うか。」と隆三は溜息を吐いて、「起きてゐれば起きてゐるで心配だし、睡てゐれば睡てゐるで又、神經に障るやうな惡い夢でも見なけりや可いがと案じられて……一體何だつて乳なぞ突いたものだらう？　出抜けに。彌張り貫一の夢でも見たのかのう。」

「夢で無くても、何か始終見てゐるやうなのですから……是で死なうとしたのも三度目ですよ。前の二度とも貴方は居らつしやらなかつたが、今日は貴方も現在あの有樣を御覽なさつて、ねえ、どんなお心持が爲さいました？」

「どんなと言うて……私は唯最う仰天した！」

「私は、酷たらしくて酷たらしくて……代れるものなら、自分が喉でも

突かれて死、死んだ方が……」とお高は袖で顏を掩つた。

「尤もだ！」

「一思ひに死んだ方が增しです！　私も此年になつて、一人きりの娘がこんな情無い……情、情無い目を見ようとは……」

「あゝ又、それを言出しても爲ようが無い。娘も不憫なれば、お互ひも不仕合と諦めるより爲方は無いのだからの。毎々私の言ふ通り、家にはかういふ病氣の血統は無いのだから、私は何、一時取逆上せたものとしか思つては居らん。此の木芽時を過ぎて、夏でも越して、追々秋口にも向つたら自と腦も鎭まらうし、縱んば全快はせんまでも、何時まで今のまゝで居るものでは有るまい。まあ〳〵氣永く見てやるのだ。」

「貴方はまあ、そんな暢氣な事を言つて居らしつて……夏を越すの、秋口に向ふのと、彼女の體がそれまで持つものと、正直お思ひなさるんですか。あの通り病氣は段々惡くなるばかりですし、虛さへあれば死なう

〳〵としてゐるので御座いますもの、今の中に早く何うかしてやらなければ、屹度最う狂死に死にますよ。」

「何うかしてやらなければと言うて……專門の博士や學士が附いてゐてすら爲方が無いものを、素人の私が何うしてやらうと思うて……」と隆三は泣くにも泣けぬと云つた顏をして出もせぬ涕を去んだ。

「いゝえ、お醫者なんか……何時診てくれても同じやうな事を言つて、首ばかり捻つてゐるのですもの、博士だつて學士だつて賴りになるものですか。それより……も今も聞いて居らしつた通り、あゝしてね、貫一の事ばかり言續けてゐるのですから、早く一度會はせてやりましたら……」

「それは私も思つて居るのだ。富山の方さへ離緣を取れば屹度連れて行く、とあれ程固く荒尾さんが引受けてくれたのだから、今日にも最う來さうなものだと、私も實は心待ちに待つてゐるのだ、法律上の手續きも濟まして、チャンと離婚屆の寫しまで添へて知らせたのだから、假ひ貫一が澁くつても、荒尾さんが連れて來ねば成らん筈なのだ。」

「そんな、他人を的にして居らつしやるより、貴方行つて、御自分に連れて居らつしやるが早道ぢや御座いませんか。」

「貫一をかい？」

「貫一で無くて誰を連れて來るんですよ！」とお高は憤れた。

「私が連れに行つて來るものなら、速うに連れて來て居るわい。一旦荒尾さんに賴んで、荒尾さんもあれほど固く引受けてくれたものを、それを差措いて、私が貫一を連れに行くと云ふ事が出來るものでは無い。あ〳〵……昨日又二度目の手紙を出して賴んでやつたから……」

「手紙なんて、悠長な事をして居らつしやらずに、使をやるなり、それとも貴方がお出掛けなされば可いのに……」

「まあさ、然うお前のやうに言うても……おや！」

老人夫婦は一度に耳を聳てた。屏風の蔭から、宮の苦しげに呻く聲が聞えたのである。夫婦は慌てゝ立つて行つて、

「宮さん、何うお爲だ？目が覺めたかい？」と先づお高が聞いた。

「痛い！」

「痛いかい？痛いので目が覺めたの。直き治るからね、體を跪かないやうに……貴方、これぢや胸を押すから、仍傷が痛むんでせう、ソウッと起してやつて、夜具へ凭れさせてやりませうよ。」

お高は夫の手を借りて、宮を寢臺の上へ座らせた。

「貫一さんは？」

「おゝ、貫一か……貫一はの、今その、直きに來るから……」と隆三は妻と顏を見合せたが、「お高、ぢや私、俥で一走り行つて行ようよ、荒尾さんまで。」と急に思立つて言つた。

「然うなさいましとも！手紙なぞぢや急な事は足りやしません。荒尾さんから直ぐ貫一の方へ廻つて、何でも今日は連れて來らつしやいましよ。」

「宮、それぢやの、私が是から迎ひに行つて、貫一を連れて來るからの、可いかい、靜にして待つて居るのだよ。」

宮は解したやうに首だけ動かした。隆三は帽子を取つて、急いで病室を出て行つた、お高は其のまゝ寢臺の傍に附添つた。

出て行つた隆三は、間も無く息を切つて歸つて來た。ドアを開けるのを梧かしさうに、「おい、お高、お高、貫一が來たよ！丁度今門の所で……荒尾さんが連れて來てくれた。」と外から知らせて、慌てゝ又引返して行つた。

「まあ、來てくれましたか！宮さん、來たよ、貫一が來たよ。」

お高も屏風の蔭から駈け出るやうにして、ドアの外まで出て見た。

長い廊下の向うから、隆三の案内に附いて、丈高い荒尾の姿と、痩せて色の蒼い貫一の姿とが見えた。近くまゝに、お高の體はワナ〳〵顫ひ

た。

「貫一さん、能く來ておくれだ！ 能く、能く來ておくれだ！」と言つて、彼女は泣出した。

貫一は默つて會釋をした。彼も荒尾も心は病室の方に取られた。

「さ、お高、こんな所でグヅ〳〵言うてゐないで、左に右く宮に……今は何んな？」

「え〻、起きて坐つてゐます。丁度鎭まつてゐますから……」とお高は急いで寢臺の方へ行つて、

「では、何うか……」隆三は二人を顧みて入口を退いた。

「さあ、間。」と荒尾は目授せした。

二人は前後してッと病室へ入つた。隆三は後に附いてドアを閉めた。

お高は立て廻した屏風を退けると、明るい光線の前に、宮の生きた骸は塑像を見るやうに端然と寢臺の上に坐つた。咄嗟の間にも、お高が心利かせて身周を繕つてやつて、取亂した所も見せなかつた。引詰めて束ねた髪は僅に後れ毛が零れて、血の浸染んだ胸の繃帶も襟で隱された。若い時の着古しを寢衣にしたらしく荒い縞の阿召に、ネルの單衣を重ねて、紫鹽瀨の伊達卷の細帶をした。雪のやうなシーツの上に痩せた膝を埋めて、花模樣の羽毛蒲團に軟く凭れた。

荒尾の逢つたのは去年の秋の末、霜に傷んだ白菊の花も重さうな姿であつた。貫一の逢つたのは同じ冬の始め、雨に濡れた山茶花の冷たく消えさうな姿であつた。何れも娘の頃の艶な俤は失せて見えたが、然かも多恨な殘英は却て人を惱殺する風情があつた。が、今見る宮には最う其れさへ見られなかつた。咲いた花の凋んだのでも無い、言はゞ形を模した造花が色の褪めたやうに、生氣のあるものとは思はれなかつた。氣味惡いほど蒼白い顏は臘細工の面形を見るやうで、筋肉の表情と云ふものが殆ど無いと言つて可い、唯美しい目のみが異樣に輝いた。

變れば變るものかな！六年前の十人並勝れた華やかな娘姿を偲ぶに就け、貫一も荒尾も胸が塞つて辭も出なかつた。一座はシンとして了つた。

「宮さん、僕は荒尾ぢや。間を連れて來ましたぞ。」と荒尾の沈痛な聲が一室の沈默を先づ破つた。「宮さん、貴方の待ち焦れた間が來たのぢや……

……分らんかな。」

宮は全で聞えないやうに、瞬き一つ爲なかつた。

寢臺の蔭に蹞つてゐたお高は、耐りかねたやうに、

「宮さん、お前分らないのかい、貫一さんだよ、貫一さんが來ておくれだよ。あんなに始終言暮らしてゐて、貫一さんが分らないのかい。情無い！本當にまあ情無いぢや無いか、あれほど待つた貫一さんだのに……」と搔口說いた。

「宮さん、貫一だ！僕は貫一だよ。能うく顏を見て御覽。」

貫一は近々と顏を寄せて、痩せ細つた宮の手を懷しさうに握つた。けれど、彼女の目は在らぬ方へ逸れて、握られた手も煩さゝうに振放つた。而して譯の分らぬ獨言を口早に喋つた。

荒尾は喟然として言つた。

「あゝ！何時ぞや途中で圖らず逢うた時に、何うしたら罪が赦さるゝか、敎へてくれいと泣いて僕に問はれた。其時覺悟一つぢやと言うて別れたが、貴方は其の意味が解けんらしかつた。が、宮さん、貴方は解けんでも、自然に解いたのぢや。間には僕が取成して上げましたぞ。あゝ、貴方は死んだも同然、活きたる死骸ぢや。死者に罪は無い、貴方は立派に最う赦された。ぢやから、此上は安心して、な、早う昔の宮さんに活き復つて貰ふのぢや……分らんかな、宮さん。」

宮は彌張り餘所を向いた。

「毎もかうばかりでも有りませんので……其中フイと又正氣に復つたりしますのですから、暫く何うか、彼方らで御一服なすつて下さい。貫一

さん、お前さんにも未だ陸々挨拶もせんで……一先づ此方らへ。」と隆三は室の一方の疊敷へ座を設けた。

それではと云ふので、貫一も荒尾も寢臺の傍を離れた。

「貫一さん！」不意に宮は叫んだ。

寢臺から一足放れた二人は、電氣にでも打たれたやうにハッと立疎んだ。一同は固唾を呑んで、言合せたやうに宮の顏を見詰めた。然し彼女の視線は相變らず外方へ走つて、貫一の見分けも無いらしかつた。

「貫一さん、貫一さん！」と續けて呼んだ。

「宮さん！」と貫一は親しい昔の呼び方をして、人目も忘れて宮の首を抱へた。

「貫一は此所に居るよ。宮さん、僕は貫一だよ……分つたかね。」

宮の目は始めて貫一の顏に直視された、而して蒼白い頰に薄く血の色が潮したと思ふと、

「貴方は……おゝ、貫一さん！」と行きなり男の腕に縋り附いて、ハラハラと涙を零した。

「うむ、分つた？」

「赦して！赦して！貫一さん。」

「赦す！」

「赦して下さい……」

「赦した！宮さん、貫一は最う赦したよ。」

「嬉しい！貫一さん。」

第八章

前の愛知縣知事森則之は、關東都督松崎大將の推薦で都督府民政長官に任せられた。而して在シンガポール領事館の法學士蒲田鐵彌が、其の外務部長に任せられたのであつた。蒲田の妻と森家とは遠い緣戚の關係もあつた。

賜暇中の大將は、新任の森民政長官とシンガポールから引揚げた蒲田外務部長とを率ゐて、近々滿洲へ歸任する事になつた。すると駐清公使から或る秘密の報告が外務省に到着した。而して都督の出發は延期された。首相の官邸には外務大臣と關東都督と三人鳩首の密議が數々繰返された。其結果、都督から民政長官に或る秘密事件が委托されて、森は蒲田と共に或る方面の人才を物色した。

森も蒲田も均しく是ならばと一致したのは、誰でも無い荒尾讓介であ

ッた。無意味の淪落から親友を救ふ爲めにも、蒲田は熱心に荒尾を說く處があつた。知遇に感じた荒尾は、終に戸塚の臥廬を起つ事になつたのである。

今日は森の紹介で、荒尾が松崎大將に面謁する日であつた、大將の邸は麻布で、蒲田が案內した。荒尾も久振に髭なぞ剃つて、五つ紋の羽織に仙臺平の袴といふ改まつた身裝で、昨日までの彼とは見違へるやうであつた。其の堂々たる風采は、押出しの可なり立派なフロック姿の蒲田が見劣らしく見えるくらゐであつた。名古屋の參事官當時と比べて、其後の辛酸は彼に深沈な態度を備へさせた。

豫て主人から通じられてあつた松崎邸の取次ぎは、直ちに二人を西洋館の客間へ通した。

「主人は森民政長官と宮中へ伺候されまして、歸りに首相の官邸へお廻りの筈ですから、只今官邸へ電話を懸けます、暫く何うか……」

取次ぎの執事は直ぐ又復命して、

「えゝ、只今電話を懸けました處、最う二十分ばかりすると用務が濟んで、民政長官と御一處にお歸りになりますさうですから、何うかお待ちを願ひたいと云ふ事で、はい。」

それから煙草盆や茶を運んだ。

「漸とまあ是までに漕ぎ着けて、是で僕もホッと安心したよ。」と蒲田は伸び〳〵したやうに椅子へ寛いで、「實はね、森が愛知縣知事を辭して、關東都督の民政長官になるつて事は、家内からの便りで僕も薄々知つてゐたのだ。然し僕が關東都督の外務部長に任せられようとは思つても見なかつたのさ。シンガポールでは皆意外に驚いてゐたよ。無論森の推薦だがね。然し同じ轉任するなら、僕は領事館で可いから、矢張りヨウロッパかアメリカへ行きたかつた。」

「相變らず君は歐米希望ぢやね。社會組織の複雜完備した文明國よりも、滿洲やシベリヤのやうな未開地や半開地で、野性的の人間對手の方が却つて面白いぢやらう。是が滿洲で無うてアメリカでもあつたら、僕は御免蒙つたかも知れん。」

「そりや君の任務は面白いのだもの。僕は外務部長と云つても、矢張り都督閣下の軍隊的命令を唯是れ奉じなければ、お氣に容らないのは分つてゐる。それには又外務省の方のお指圖も煩いだらうし、近所には領事館といふ小姑も睨めてゐるし、仲へ挾まつて然ぞ苦しまなければ成らない事だらうと思ふよ。それで何か功を擧げた處で、譽れは結局上官に歸すると云ふのが決りさ。」

「上官には又上官がある。官吏は皆然うぢやよ。上官を頂いて緣の下の力持ちが厭なら、君も一躍國務大臣にでもなるか、然も無けりや僕のやうに官吏を歇めるのよ。」

「官吏を歇めても、君の今度のやうに面白い任務でも有りや可いが……

有つても僕では用ゐてもくれなからうし、彌張り外務部長で精々上官の御機嫌を取結ぶ事かな、はゝゝゝ。」と蒲田は笑つたが、「いや、君を今度起たしめたのでも、蒲田外務部長が都督府に奉公始めの大動だよ。實はね、最う一ケ月も前に、都督も我々も向うへ赴任する筈だつたのが、例の一件で急に出發は延期され、首相邸で秘密會議の結果が、都督から其の秘密任務の人選を森へ委任されたのだ。僕も相談對手にさせられて、誰が好からうと彼が好からうで隨分頭を惱ましたものさ。陸軍部内には然ういふ方面に適當な人才も有るらしいが、軍人や軍人揚りでは各國の猜疑を招くから可かん。と云つて在野の人物を物色して見ると、そんな方面にでも間に合ひさうな人間は、幾らか皆政黨なぞに關係がある。それがあつては妙で無いと云ふ都督の意見だし、なか〳〵人選が難しかつたのだ。結局君ならばと云ふ意見が僕も森も一致したものだから、都督にも君の人物閲歴を話して、それから君の出廬を促しに僕が戸塚へお出度を踏んだ譯さ。森は又森でね、愛知縣當時にあゝいふ譯で、君を免官させた覺えがあるものだから、それを腹に持つて君が應諾しないだらうと、頻りに神經を惱した。」

「はゝゝゝ、それほど荒尾は私情に拘泥しはせん。ぢやが去年の冬、偶然鎌倉でお目に懸つた際、僕の零落の姿を見て何と思はれたか……同情されたのか、憫まれたのか、左に右くそんなやうな口氣が見えた。からして今度も、然ういふ御好意から森さんが僕を推薦さるゝやうならそりや御免を蒙りたい。僕の今日あるは敢て參事官を免職された爲めでも無ければ、無論森さんの所爲では無い。隨つて森さんに同情さるゝ理由も、憫まるゝ理由も無いのぢやから、森さんの御好意と云ふやうな然ういふ私意私情を放れて、全く荒尾を用ゆる事が、適處に適材たる事が認められた上で無ければ、とかう思うてな、それで僕も直ぐには應ずる事が出來んかつたのぢや。」

「君の氣性は僕も能く承知してゐるから無論森の好意とか同情とか、そんな私の關係から君を推薦した譯では決して無い。適處に適材たる事は公平に森も認めてゐる。君が若し應じてくれん時には、此の人選は當分絶望だとまで僕に言つてゐたくらゐだからね。まあ然し君が承知してくれて、森も是で都督に對する面目も立つし、僕も亦面目を施した譯さ。然し今度は骨を折らせたよ。」

「然うぢやつたな、まあ恕してくれ。僕ぢやつて何時まで失意で居たうは無い、貧乏にも飽きた。僅か三千や四千の高利に祟られて、壯年爲すあるの期を、かうして空しく落魄の中に過すかと思ふと心外でもあつた、半宵夢覺めて、思はず枕を濡らすやうな事も無いでは無かつたのぢや。處へ君から今度の滿洲行きの話、任務も重大ぢやが、それだけ又快心な事業ぢや。是を大きくすれば國家の爲め、東洋平和の爲め、荒尾半生を賭して遺憾は無い。男子須らく起つべきの秋と、そりや全く劍を按じて飛び出したいほど心は動いたのぢやが、然し、官吏には僕も懲りとる。體を縛られて、上官の言ふ事とあれば命是從はんければ成らん、それでは今度のやうな任務の遂行は覺束ない、絶對に自由行動を許して貰はんければと思うたものぢやで……究りは任務の遂行に對する責任を重んずりやこそ、色々我儘な註文も出したのぢや。君にはそりや氣の毒ぢやつたよ、然し君が仲へ入つとらんけりや速うに此の話は破れたのぢや、僕も密に君を德として居る。」

「有難い仕合せで……いや、笑談は措いて、君の註文が難しいものだから、都督も頻りに首を捻つてゐる、僕も實際今度自分の職を賭して爭つたのだ。容れられなかつたら何に、外務部長を棒に振つて了ふだけだと覺悟したのさ。」

「感謝する！　友人なればこそ、なあ！　君の其の僕を思うてくるゝ厚意に對しても誓つて任務の成功を期する！　まあ長い目で見とつてくれ。」と荒

尾は深い決心の色を見せて言つた。

「見てゐる、刮目して見てゐる、誓つて成功してくれ給へ！」と蒲田も熱心に言つたが、偶と思出して、「友人と言へば、間は君の熱誠に動かされて改心したと云ふ話だつたが、其後何うしたね。」

「間か、うむ、今熱海へ行つて居る。例の發狂した昔の戀人を引取つてな、熱海で養生させて居る、彼も到頭眞人間に立復つてくれたよ、僕も最う心に懸る雲も無しぢや。」

「君もそれで、心殘りが無く滿洲へ立てると云ふものだ。」

其處へ奥女中らしい身綺麗な女が入つて來て、二人に丁寧な會釋をしてから、

「あの、荒尾樣と仰しやるのは貴方樣で？　曩程から森樣の奥樣がお見えで御座いまして、貴方樣のお居での事を御存じになりまして、御前のお歸りをお待ち遊ばす間、お差支へが無ければ、些いと其方らでお目に懸りたい、と然う仰しやつてゞ御座いますが……」

「森さんの奥さんが？」荒尾は些つと不審さうに見えたが、「はあ、差支へありませんから、何うかお來で下さいと。」

女が入つて行くと、後で蒲田が言つた。

「夫人は君に、何だかお詫びをしたいと言つてゐたから、大方其の事だらうよ。」

「何も詫びをさるゝやうな覺えも無いが……」

「憲作と云ふ始末に終へない悴があるので、何でも其男の事らしいやうな口振だつた。」

女に案内されて、森夫人の幾子が來た。

「蒲田さん、昨日は失禮致しました。」

「いや、私こそ。」

「荒尾さん、御機嫌宜しう。何時ぞや鎌倉では失禮致しました」と夫人

も幾らか極り惡さうであつた。

「僕こそ失禮しました。」と荒尾は辭寡なに答へた。

「承はりますれば、此度びは又、何か大切なお役目で滿洲へ御出張なさいますさうで、誠に御結構な事で御座います。」と丁寧な其の挨拶振りは、毎もの思揚つた調子と違つた。

「いや、重ねて又御主人の御厄介に相成るやうな都合になりまして……彌張り盡きない御緣と見えますぢや。」

「それに就きまして、折入つて貴方にお願ひが御座いますので……」

「如何です、まあお掛けなすつたら。」と傍から蒲田が椅子を薦めた。

薦められるまゝに、幾子は靜に椅子に就いた。

「僕に？はあ、何の御依賴ですか。」と荒尾は一層不審らしかつた。

「外でも御座いませんが、あの憲作で御座います。那男の事では貴方からも御注意を頂きましたので御座いますが、俗に申す親馬鹿とやらで、仰しやつて下さる貴方を却てお怨み申したやうな次第で……今になつて誠に面目も御座いません。それでも未だ名古屋の方に居ます中は、彼も惡い事を致すにしましても、私どもには內密で、親に讀られるのを怖がつてゐましたもので御座いますが、此節では最う親なぞ何とも思はないので御座います。何か申すと直ぐ反抗しまして、全く手に乘らないので御座います。鎌倉で貴方にお目に懸りました……あれは慥か昨年の暮で御座いましたね。」

「然うです。失禮ながらあの時にも、大分又名古屋の頃とは、御子息の御樣子が面白くないやうに僕も思うたのです。」

「お恥しい次第で御座います。」と幾子も面目無げに、「親は何處までも慾目で、彼れも明けて最う十七、何時までも子どもでは無いから幾らか分別も出來たらうと存じまして、今年の春から此方らの中學校へ入學させましたので御座います。此方らでは私の生家へ預けまして、其所から通

はせて置きました。それが飛んだ間違いで御座いまして、生家でも家の者とは違つて然う〳〵嚴しくは出來ませんし、憲作は又それを可い事に、一層惡跟きが嵩じまして、到頭學校の方も退校されましたので御座います。いえ、それだけなら未だ宜しいのですが、警察の方から内々注意が御座いましたやうな次第で……主人には其れまでは申さずにありますが、其中には屹度親の名までも傷けるやうな事を爲出來さうと思ひまして、私も一人で心配致して居るので御座います。」

「いや、それ程とは私も知らなかつたのですが……」と蒲田も意外に驚いて、「そんなでは然し、御注意なさらんと可かんですな。名家の子息で、大分然ういふ例を近頃新聞でも見受けるやうですが……そりや今の中に何とか斷乎たる處置をお取りなさらんと、取返しの付かん事が出來ますよ。」

「私も然う思ひまして、色々躾方も考へて見ましたので御座いますが……學校教育なぞと申す手温い事では、到底も最う見込みは御座いませんので……と申して豈か懲治檻へも遣れませんし、何分主人の名前が先きに立ちますものですから、思切つた躾方も爲得ないで居るやうな始末で御座います。それで、荒尾さんにお願ひと申しますのは……」

「はあ。伺ひませう。」

「誠に御無理なお願ひで、御迷惑と存じて居ますが……如何でせう？　彼れを一つ滿洲へお連れ下さる譯には參らないでせうか。」

「御子息を？　成程。」と言つて、荒尾は訝しさうに幾子を見た。

「妙な事から、親よりも誰よりも一番貴方が、彼れには怖い方なので御座いますから……あゝいふヤクザな人間を一人救つて下さると思召して、一つ何のやうにも、貴方のお心任せに爲すつて見て下さいませんでせうか。外の事は左に右く、體力だけは至つて最う壯健で御座いますから、滿洲のやうな懸離れた知らない土地で、ウンと嚴しく逐ひ廻して頂いた

らと、然う思ひますので御座いますが……ねえ蒲田さん、如何なものでせう。」

「さあ……」と蒲田も返事に困つて、「何んなものだらう、荒尾君、奥さんもあんなに言はれるのだが……」

「面白からう。」と荒尾は無雜作に言つた。幾子に、「失禮ぢやが、女親の貴方が、それまでに御決心なさつたお心情は荒尾もお察し申します。御本人の爲め、又御家名の爲めにも能う御決心なさつた。宜しい、僕も一つ考へて見るです。で、それに就いては色々貴方の方にもお考へがあらう、又御希望もあらう……」

「いえ最う、貴方が御承知さへ下されば外には希望も何も御座いませんので……唯貴方のお心任せに……」

「ですが、肝心の御本人の意向も分らんし……」

「本人は、貴方が怖いだけに又、貴方と云ふ方を非常に御尊敬してゐるので御座いますから、無論厭は申しません。又申させるものでも御座いません。」と幾子は思入つた氣色であつた。

蒲田は宥めるやうに、

「まあ奥さん、荒尾君もあゝ言つてゐるのですから……面白からう、一つ考へて見ると言つてゐるのですから、後は荒尾君の考へ次第にお任せなすつたら可いでせう、何れ僕からでも、能く荒尾君の意見を確めて御返事も爲ませう、又御本人始め貴方の方の御意向なり、御希望なりも、改めて僕が伺ふと爲ませう。」

「然やうで御座いますか……」幾子も其上強つては言ひかねて、「では、萬事貴方にお任せ爲ますから、何分とも宜しく……荒尾さん、御無理な處も枉げて何うかお考へ下さいまして……貴方には再三お心持をお惡くお爲せ申してゐるのですから、こんな事を今更お願ひ申された義理では無いので御座いますが……」

「いや、それはお互ひです。」と荒尾は打消して、「左に右く一度、[illegible]子息を僕の處までお寄來しなさい。獨りで來憎ければ蒲田君でも連立つて。」

「それが可からう。」と蒲田も同意して、「奥さん、然う爲さい。本人が直談判の方が話の決りも早い、僕が同道しませう。」

「然やうで御座いますね。」と幾子も意を得たやうに頷いて、「然うお願ひする事に爲ませうか。」

此時、表門の方に馬蹄の響、砂利を軌る轍の音、續いて「お歸りい！」と叫ぶ馬丁の聲が此間まで聞えた。

「おゝ、お歸りて御座います。」と幾子は急いで椅子を放れて、「では、然う願ひますから、何うぞ宜しく。」

幾子が出て行くと入れ違ひに、執事が入口のドアを後手に押へて、

「只今お歸りで御座います。」

荒尾と蒲田はッと椅子を立つた。

其二

金光燦爛たる陸軍大將の正裝をした松崎都督と、金モールの大禮服を着けた森民政長官と何れも宮中へ伺候した其姿であつた。

「や、お待たせして濟まんぢやつた。」と大將は二人を見て言つた。

蒲田は一禮して、

「豫てお話し申上げた荒尾君を同道しました。荒尾君、松崎大將です。」

荒尾は一歩進んで、

「荒尾譲介です、お見知り下さい。」

「私松崎ぢや、能う來て下さつた。さあ掛けて下さい。」と大將は先づ自分の椅子に着いた。

「荒尾君、暫くだつたね。」と森は有繋に懐しさうであつた。

「いや、誠に暫く……此頃中始終蒲田君からお噂は聞いて居りましたが、

毎も御健勝で何よりです。」

「今度は又不思議な縁で、君に一奮發して貰ふ事になつた。」

「それに就いて、色々又我儘な註文を申出まして相濟まんです。然し御寛容を得まして荒尾も本懷です。此上は進んで唯任務の遂行をお目に懸くるのみです。」

荒尾の稜々たる氣骨と、昂然たる意氣とは、僅な言動の中にも現はれずには措かなかつた。松崎大將は一目で最う信じて了つた。

「私は氣に入つた。安心して君に任する。任務の內容は承知ぢやらうで、冗々しい事は言はんが、君も知つとる通り、滿洲は元來清朝の發祥地ぢやあるし、隨つて南部蒙古と支那本部、北部蒙古と露國の政策……色々君の研究を勞はさねば成らん。が、是を總括してぢや、君は全體支那の前途に對して、何ういふ意見を抱いて居らるゝな？」

「支那の前途と申すと？」荒尾は問返した。

「究りぢや、今日の有樣でジリ〳〵衰退するものか、乃至は國體の變革と共に再び盛り返すものか、其の如何に由つては日本と言はず、東洋全體、延いては世界列國の國是にも關する事ぢや。」

荒尾は重々しく頷いた。

「荒尾一箇の考へでは、無論支那の前途は、悲觀すべきもので無いと信じるです」

「で？」大將は後を促すやうにジッと荒尾の顏を見た。

森も蒲田も一樣に彼を見詰めた。

「元來支那なる國は、御承知の通り、上下四千年來の間に二十四朝の興亡がありましたぢや。然し何の朝の代る時にも、新朝の建設さるゝと同時に、腐朽した舊朝の思想は全然一掃さるゝ。それが敢て政治のみでは無い、文學でも、美術でも乃至は工藝でも、皆新しい思想と、新しい氣力とが溢れて、何時も其處に新しい一大文化を現出しますぢや。周漢然

り、唐宋然り、清朝又然りである。からして手前は、今度の政體の變革國體の變革は、旋て又新らしい一大文化の花が、支那に返り咲く時代を現出するに相違無いと信じるです。是を人物に徵して見ても東西の歷史を通じて、支那くらゐ偉人の輩出した國は無い。支那史上に現はれたやうな大聖人、大哲學者、大英雄、大政治家を兼ね有する國は、世界に國多しと雖も他に一國も有る無し。彼のローマ帝國の盛大を以てするも、尙ほ僅に支那の唐代を以て比較するに足るくらゐのものでありますぢや。斯くの如く古來偉人の輩出した國が、今後果して偉人を輩出する事無しと斷言し得るか……そりや地氣盡きて物實らずと云ふ事はあるが、然し今後少なくとも三十年のゼネレーション三百年のダイナスチーの間に、果して偉人の輩出する時期無しとは、支那の歷史を知る以上、恐らく斷定は出來んぢやらうと思ふです。現に支那を深く研究した外人の多くは……殊にロバート、ハートの如きは、支那の遲緩ながらも偉大な發展の途にある、支那人本來の人格は尊敬に値すると言つて居る。又モリソンの如きも、支那の軍隊は後來必ず世界有數の軍隊となる事を公言して居るです。一體日本は是まで餘りに支那に近いのと、國民性の全然反對であるのとの爲めに、却て支那の眞相に通ずる事が出來んかつたでは無いですか。手前は多くの日本人の言ふやうに、支那前途の悲觀說には同じ難いです。」

荒尾の其の力ある言說は、一座を傾聽せしめるに十分であつた。蒲田は自分の事のやうに嬉しく目を輝かして、テーブルの蔭で固く荒尾の手を握つた。森も松崎も醉はされたやうになつて、暫く辭も無かつた。

「能う論じられた、うむ、武人の私にも能う理解された。」と大將は幾度びか頷いて、「支那に對する君の其の理解と同情とを以て、今後の活動を望みますぢや。」

荒尾は靜に頭を下げた。

其處へ、例の執事が入つて來て、

「えゝ、食堂の御用意が出來まして御座います。」と通じた。

「おゝ、然うか。では諸君、彼方らで粗餐を呈するから。」と大將は先づ立つた。

大將に續いて森も立つた。蒲田と荒尾は少し後れて椅子を放れたが、

「荒尾君！」と蒲田は行きなり荒尾の手を握り締めて、「何うも。素敵な出來だつたよ。」

「些と何うも誇張の氣味で……餘り調子に乘り過ぎて。」と荒尾は苦笑ひした。

「いや、結構だ！」

第九章

六年間の思ひが届いて、宮は貫一の腕に知覺を復したのであつた。貫一を始め荒尾も鳴澤の老夫婦も、散つた花の再び枝に返つたやうに喜んだものゝ、それは僅の十數分間の砲氣無い糠喜びであつた。貫一に取縋つた其手が弛み、泣いて喜んだ其涙が乾く頃には、彼女は又病的の悒鬱に陷つた。而して貫一の見境も無かつた。

然し此の會見は、彼女の狂つた精神を多少でも鎭靜させるのに無駄では無かつた。それからは不思議に發揚する事が少なくなつた。發作の起る事があつても、貫一が來合せさへすれば、暫くは必ず正氣に復するのが例となつた。其の中に發揚の方は全く迹を絶つて、そんな徵候の見える場合には自然と正氣に復つた。正氣で無い時は、唯夢現の境にあるやうに昏濛としてゐた。

其の正氣に復した時でも、六年間の彼女が憂い愁い記憶は、全然忘れられて了つたやうであつた。言ふ事も爲る事も、總て結婚前の娘時代に限られてゐた。彼女は少なくとも彼自身の心の中に於いて、六年以前の處女時代に復活したものらしかつた。

こんな風で、最う病院に置く必要も無かつた。貫一とも相談の上、醫師の許しを得て、鳴澤夫婦は一先づ娘を家へ引取つた。而して鳴澤から改めて貫一の許へ送り屆けた。

其時は貫一も、高利貸の後始末は略ぼ片付いてゐた。三番町の家も引拂つて、思出の多い熱海に引込んだのは二月の末。宮の外に久しく使つてゐる豐と云ふ老婢も連れた。荒尾から托された孤兒の亮一も、鎌倉から連れ歸つた河原夫婦達も一處であつた。

熱海の住居は町から少し離れて、和田へ寄つた小高い岡の上の一軒家であつた。貸別莊と云つた風な粗普請の平家建てゝあるが、周圍の廣いのと、見曠しの好いのとが取得であつた。沖の初島を正面に、相模灣の風光が座敷から一目に望まれた。

東京では漸と彼岸櫻が咲き出さうと云ふ三月始め、此所では麦う梅園の青梅が新らしい綠の蔭を作つた。魚見崎の朝霞横磯の夕霧、鎌浦の濱鯛が肥えて、熱海の春は闌けた。蒲公英や菫交りに青々と萌え揃つた芝生の庭の、海を見曠した細長いベンチには、宮と亮一とが腰掛けた。病める二人は、毎もかうして暖い日光と、新らしい海氣とに浴するのが日課のやうになつた。

宮は紋羽二重の中古の被布に、病體の細帶姿を掩つた。頭は輕い結髮にして、蒼い陰鬱な顏は病院當時と變らなかつた。然し其頃とは幾らか肉附いた。目付きも穩かになつて、不斷は少しも心の狂つてゐるやうに見えなかつた。唯悒鬱性の沈默は今でも頑固に續いた。默つてベンチに腰掛けたまゝ、ジッと首を垂れて身動きもしない。目を伏せて一所を見

詰めた。傍から妨げない限りは、毎もかうして二時間でも三時間でも動かなかつた。

亮一は又、東京に居る頃より一層衰弱したのであつた。去年以來の肋膜は終に肺を侵して、此節は厭な咳さへ出た。

今着いた郵便を受取つて、緣側へ出て來た貫一は、亮一の苦しさうに咳き入るのを見て思はず眉を曇らせた。

「可いかい？　二人は薄着ぢやあるまいな。」と緣先から言つた。

二人は向うを向いたまゝ返事は無かつた。

貫一は沓脫の庭下駄を引懸けて、ベンチの傍へ行つて、

「宮さん寒かないかね？」

宮は顏を上げてジッと貫一を見た。而して唯首を掉つた。

「亮坊、君は可いかね。外氣に當るのは可いが、薄着では可かんよ。」

「僕、寒かない。」

「今日は何んなだい？　氣分は。」

「爰所が苦しいの……小父さん、僕死ぬんだらうか。」と亮一は自分の胸を押へて見せて、悲しさうに聞いた。

「何故？」

「でも、昨日吸氣館で、お醫者が內密で何か姐さんに言つてたもの、僕の事を。」

「小兒がそんな神經を廻すものぢや無い。」と貫一は强ひて取上げぬやうにして、「そんな充らん事を考へずに、早く丈夫になつて、荒尾の小父さんに褒められなければ……今夜小父さんが見えるよ、今手紙が來た。」

「然う、僕可けないなあ……荒尾の小父さんには惡いつて事言はないでね、小父さんが心配するから。」

「可々、言はずに置かう。心配爲せまいと思つたら、早く良くなるやうに精出して藥を服んで、それから蒸氣の吸入を缺かさずに遣るんだよ。」

今日は未だ吸氣館へ行かないね。」

「最う少し經つたら、姐さんに連れてつて貰ふの。姐さん手が空くと連れてくつて。」

「然うか。亮坊は悉かり雪野姐さんに懐いて了つたが。あの人も氣の毒な人なんだから、無理を言つたり困らせたりしては可かんよ。」

「無理なんか言はないの。で無くつても姐さん能く獨りで泣いてるの。」

「然うだらう……氣の毒な人だ！」と貫一は溜息のやうに言つた。

「だけど、此方らの小母さんも氣の毒だね。」と亮一は子ども心にも傷はしさうに宮を見て小聲に言つた。

貫一もつい子どもの辭に釣り込まれたが、氣を取り直したやうに首を掉つて、

「何に、此方らの小母さんは、前には氣の毒だつたが、今では最う仕合なんだよ。」

「でも、人の言ふ事分らないんだもの、獨りで考へてばかし居て……何考へてるの？」

「それは、人には分らない、小父さんにだけは分る。」

亮一は頷いて、

「だもんだから、小父さんの言ふ事だけは、何でも小母さん肯くね。」

「然うだ。」

處へ、老婢の豐が牛乳の入つた湯煎の罐と、コップを二つ盆へ載せて奥から持つて來た。

「お乳を……奥樣のも坊ちやんのも御一處に暖めて御座います。」と縁先へ置いてコップに注ぎ別けた。

亮一は太儀さうにベンチを放れて來て不味さうに其れを飲み出した。

宮の分は、貫一が持つて行つて飲ませてやる。

「宮さん、さあ、牛乳だよ。お上り。」

宮は例の如く默つて顏を見て、而して首を掉つた。

「厭？ そんな事を言はないで、折角婆やが暖めて來たのだから一口でもお上り。」

貫一が然う言ふと、宮は素直に一口附けた。後は顏を背向けて最う飲まうとは爲なかつた。コップに半分以上殘つたのを、貫一が自分で飲んで空けた。

「それでも旦那樣が仰しやると、あゝして一口でも、お口をお附けなさいますんですものねえ。」と豐は沁々言つた。

「段々肯分けが出來て來るやうだから、かうして追々に恢復するだらう。まあ氣長に介抱してやるのさな。」と貫一も慘らしさうに宮の姿を見やつたが、「夕方になると薄ら寒くなるから、家へ最う入つた方が可からう……宮さん、風邪でも引くと惡いから家へお入り。そして些と横になつて體を休めると好い。」

貫一が手を取つてやると、宮は大人しくベンチを放れた。

「ぢや豐、奥へ連れて行つて寢させてくれ。」

「はい。奥樣、お危う御座いますよ。」

宮が縁側を上ると、豐は背後からソッと手を添へながら奥へ連れて行つた。

貫一は其所に置いた手紙を最う一度讀み返した。

亮一はチビ〳〵嘗めるやうにしてゐた牛乳を、此時漸と飲み干した。コップと湯煎と一處に盆へ載せて、而して庭から持つて行かうとする出合頭に、

「亮ちやん、お待遠だつたわね。さあ、手が空いたから行きませう。」と木戸の外から聲を懸けられた。

それは雪野であつた。小ザッパリした銘仙物を着て、鄕里に居た頃の質素な娘姿を其のまゝであつた。何所やら打沈んで、勢の無い寂しい顏

が急に二つ三つも老けて見えた。娘々した昔の無邪氣さは最う見られなかつた。手にタオルと石鹸函とを持つて木戸を入つて來た。

貫一を見ると、

「あの、何か御用も御座いませんか。亮ちやんを連れて私も一風呂入つて參りたいと思ひますが……」

「いや、別に今用も無いが……」と貫一は手紙を卷き收めながら、「今ね荒尾君から手紙が來て……是だが……今日四時に、大館さんと國府津へ着くさうだ。」

「え、父が？」雪野はハッとしたやうに色を變へた「荒尾さんと御一處に……」

「國府津へ四時だから、此方らへ着くのは何れ七時過ぎでせう。」

「私、お目に懸る顏は無い……」と思餘つたやうに呟いた、「阿父さんにも、荒尾さんにも……面目無い！」

「今更ら面目無いからと云つて……お目に懸らない譯には行かないから、お詫びをする處は能うお詫びをして、此際何とか貴方の體の決りを附けて了ふのですね、何にそんなに心配する事は有りませんよ。私からも能く取成さうし、決して惡いやうには爲ないから。」と貫一は慰めて、

「では、今の中に湯へ行くなら行つて……亮一も一處に連れて行つて貰ふ意りで、曩から待つてゐるから。」

「はあ……」と雪野はガックリ俛れて了つた。

「さあ、亮坊、姐さんと一處に。」

「姐さん、ぢや、行かう。」と亮一は促した。

雪野は物思はしげに萎れ返つて、悄々と亮一の後に附いた。

「あ、雪野さん。」と貫一は呼び留めて、

「河原さんは？」

雪野は自分の屈托に心取られて、何を言はれたか分らなかつた。

「ね、河原さんは其所らに居ませんか。」

「えゝ、あの、下の圃へ水を遣つてゐましたが……」

「ぢや、貴方ね、行き懸けに些つと今の事を河原君にも知らせて置いて下さい。」

「はあ……」

雪野は鎌倉以來妙に沈み込んで了つた。年の行かない亮一を唯一人鮮敵に、紀雄とさへも餘り口を利かなかつた。貫一に對しても、恩人として敬ひもし勸めもするが、打解けて話をするなぞと云ふ事はついぞ無かつた。荒尾と一處に父が來ると聞いて、合せる顏は無い、面目無いと云ふ以外に、口には出さぬ心の苦悶は顏にも樣子にも察せられた。貫一は其の慘らしげな後姿を見遣つて、獨り心に思つた。

「あゝ、可哀さうな女だ！荒尾君の此の手紙の樣子でも、大舘老人の立腹は一通りで無いらしい。故々僕の所へ來ると云ふのに、娘には決して

會はん。僕が荒尾君の爲めに赤樫の方の債務を片付けた、其のお禮は言はねば成らんが、娘を救つて貰つたお禮は能う言はんから、前以て其れを斷つて置いてくれと言ふのださうだが……然し親身の親子だ、荒尾君の言つて寄來した通り、無理にも會はせるのだ。そして田舍へ引込んで、兩親の手許で平和な生涯を送るのがあの娘の爲めにも幸福だ。」

彼は荒尾の手紙を封筒へ入れて袂へ藏つた。其のまゝ縁側へ腰掛けて、雪野の事から紀雄の事、延いて亮一の事なども考へ續けた。

偶と岡の下から、邸の門前へ登つて來る轍の音が聞えた。

「俥のやうだが……誰か來たかな。荒尾君達にしては未だ早いが……」と不審さうに耳を聳てた。

「あの、東京から赤樫樣が來らつしやいました。」と豐が取次いで來た。

「赤樫が？ふむ、最う來たのか。」と貫一は眉を顰めたが、「爲方が無い、通してくれ。」

「此方らへ？　はい。」と滿枝最負の老婢はイソ〳〵庭を出て行つた。

「雪野さんを、大舘老人に連れさせて歸してからで無いと拙かつたに……」

……最う遣つて來たのか。」と貫一は當惑さうに待つた、

老婢に案内せられて、滿枝は庭口へ廻つて來た。着物から持物、頭の先から足の先まで、例に由つて貴族的の彼女が嗜好は、其の濃艶な容色を輝くやうに見せた。

「何うも暫く。御機嫌宜しう御座いますか。」

「大層お早くでしたね。手紙は御覽下すつて？」

「えゝ、來週と云ふお手紙で御座いましたが、來週は丁度亡くなつた佛の佛事を營みますものですから……それに私、お手紙を拜見しますと最うジッと爲ては居られませんで……」と滿枝は零れるやうな得意の愛嬌を先づ浴せて、私に來いと云つて、間さんからお手紙を頂くなぞは滅多に無い事で御座いますもの　私、何を差措いても飛んで參りましたの、誠に暫く……何時お目に懸りましたきりで御座いませう？」

「つい先達て……御主人のお亡くなりの時にもお目に懸りました。」と貫一は苦い顔をして答へた。

「あゝ然やうで御座いましたね、權三郎の葬式の際、寺で些いと……其の節は又御丁寧に御會葬下さいまして、恐入ります。」と眞珠の光る頭を下げて、「ですが、かうして土地が離れますと、長い事最うお目にでも懸らないやうな心持が致しまして。」

「まあ然し、お上り下さい。」と貫一は先づ沓脱を上つた。

座敷には豐が氣を利かして、座蒲團や茶煙草盆が運んであつた。滿枝も沓脱を上つて、座に着くと言つた。

「大變御眺望がお宜しくつて、結構なお住居で居らつしやいますね。彌張り御病人も……宮子さんと仰しやいましたね、あの方も御一處で……」

「然うです。それから、荒尾君の所に居た宍原亮一と云ふ子も。」と言つ

て、貫一はジッと滿枝の顏を見た。

「おや、然やうで御座いますか！」と滿枝の聲は思はず突走つたが、直ぐ又白々しげに笑つて、「それはまあ仕合せで御座いますね、戸塚の荒尾さんの所に居ますとは、何のくらゐあの子も……然ぞ喜んでゐますで御座いませう。」

「何うです、一つ御相談ですが、貴方も御主人は亡くなるし、お寂しいでせう。子どもを一人何うです？亮一を上げませうか。」

「さあ……」と小首を傾げて、貫一の其意を讀まうとするものらしかつたが、「あの子は、高利貸は人間で無いから嫌ひださうで御座いますよ、何時か戸塚で私に然う申しました。其處は彌張り荒尾さんのお爲込みで。」

「いやそれは、荒尾君からも僕に斷りがあつたので。亮一を貰つて頂くに就いては、無論貴方も是までの職業を廢して頂かねば……ねえ赤樫さん、先達てお宅へ上つた節にも冗く申上げたから、最う繰返しは爲んが、御主人も到頭亡くなられた……から、とて、お困りなさる貴方では無かうけれど、丁度好い潮時だから、爰等で脚を洗つたら何うです。何萬か何十萬か知らないが、それだけの遺産もある上に、其上何を好んで高利貸なぞ繼續なさらうと云ふのですか、金を貸して約束通りの利を取る、まあ正當と云へば正當の職業でありながら、人からは鬼のやうに思はれ、人間で無いやうに言はれて、恨まれたり憎まれたり、全く引合つたものでは無いのです。然う言ふ貴樣も、昨日までは彌張り然うだつた癖に、と思ひなさるか知らないが、僕は現に然うだつたからこそ……自分も覺えがあるから貴方にも言ふのですよ。かうして脚を洗つて見ると、能くあんな事が出來たと熟々思ふですね。心が輕くなつたと言はうか今の此の清々した氣持……是だけでも金には代へられません。貴方は亡くなられた御主人とは違ふ、始めから高利貸に成らうと思つて成つた譯でも有るまい、と僕には思はれるので……。」